令和5年度
企画展示

SCRAP BOOK

多摩新街 遺跡切抜帖

たまニュータウンいせき スクラップブック

—新聞にのった遺跡たち—

Tama New Town Archaeological Sites in Newspapers

ともすると、日常からは縁遠く感じられる「遺跡」。しかし遺跡は私たちの足元にも眠っています。

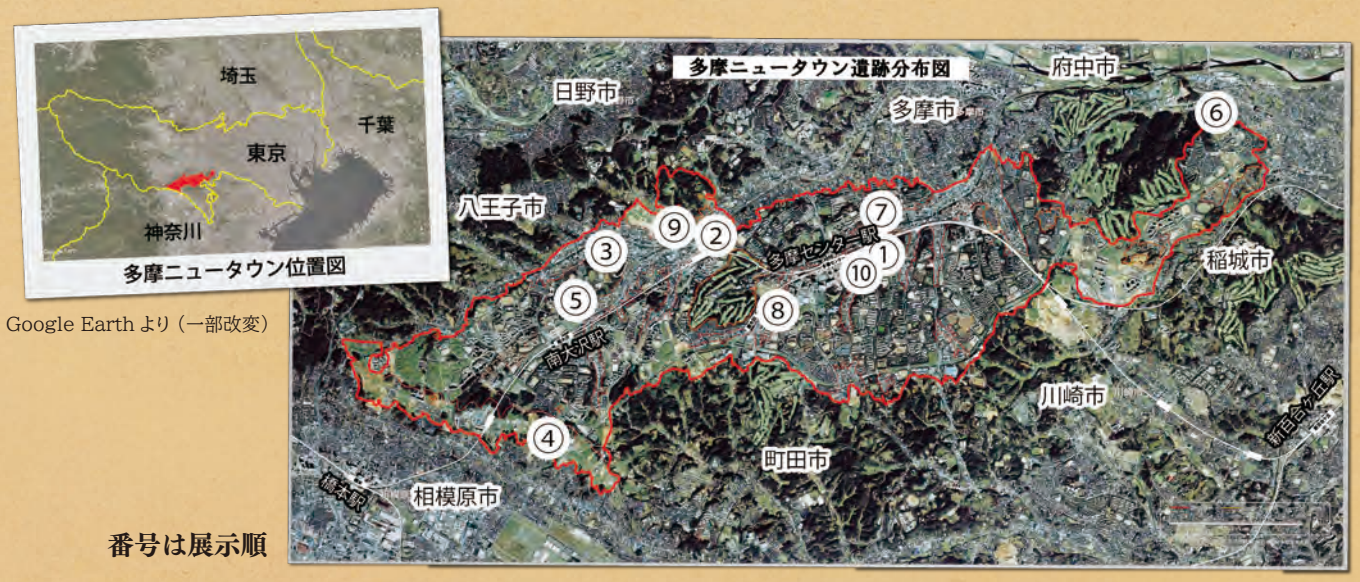
東京のベッドタウンとして開発された多摩ニュータウンでも数多くの遺跡が見つかり、その発掘調査成果は時に新聞紙面を飾って私たちを驚かせました。

ここでは新聞記事で当時の驚きを追体験しながら、再びその価値に触れてみましょう。

凡例

この冊子は、東京都立埋蔵文化財調査センター令和5年度企画展示『多摩ニュータウン遺跡切抜帖』の解説冊子として作成しました。
この解説冊子で取り上げた遺物・写真資料は、東京都立埋蔵文化財調査センターに所蔵されています。
この企画展示は、東京都教育委員会の協力により開催しています。
この冊子に掲載した新聞記事はすべて転載禁止です。

新聞にのった遺跡の位置



Google Earth より（一部改変）

番号は展示順

遺跡一覧

番号	多摩ニュータウン遺跡番号	遺跡所在地	時代	資料名 ※数字は出陳点数
①	*769*	多摩市	旧石器時代	▽尖頭器4▽細石刃5▽細石刃核2▽ナイフ形石器3▽台石1▽敲石1
②	*426*	八王子市	旧石器時代	▽尖頭器7▽細石刃核1▽ナイフ形石器7▽削器1
③	*916・917*	町田市	古墳時代	▽広口壺2▽甕2▽高坏2▽壺3
④	*107*	八王子市	奈良・平安	▽木皿4▽蓋1▽曲物1▽鋤1▽鞍1▽須恵器　坏2▽須恵器　坏蓋2
⑤	*484*	八王子市	中世	▽大量出土銭(実物による復元展示(部分))
⑥	*513*	稲城市	中世	▽板碑3▽五輪塔(空風輪)1▽五輪塔(地輪)1▽五輪塔(火輪)1
⑦	*450*	多摩市	縄文時代	▽土器片1
⑧	*753*	多摩市	縄文時代	▽浅鉢4▽深鉢4▽土製玦状耳飾5▽土玉1▽石製玦状耳飾3▽石製玦状耳飾未製品1▽石製管玉2▽石製丸玉3▽石鏃2▽石錐1▽石匙2▽石槍1▽打製石斧1▽磨製石斧2▽礫器2▽加工礫3▽石皿1
⑨	*72・795・796*	八王子市	縄文時代	▽縄文土器　浅鉢1▽縄文土器　深鉢19
⑩	*57*	多摩市	縄文時代	▽土器片6

No.	Tama New Town Site No.	City	Period	Objects (the number following the name of each object indicate the number of exhibits.)
①	*769*	Tama	Paleolithic	▽Points 4▽Microblades 5▽Microcores 2▽Knife-shaped tools 3▽Anvil stone 1▽Hammerstone 1
②	*426*	Hachioji	Paleolithic	▽Points 7▽Microcore 1▽Knife-shaped tools 7▽Side scraper 1
③	*916・917*	Machida	Kohun	▽Wide-mouthed Jars 2▽Pots 2▽Pedestaled bowls 2▽Jars 3
④	*107*	Hachioji	Nara/Heian	▽Wooden plates 4▽Wooden lid 1▽Wooden container 1▽Spade 1▽Saddle 1▽Bowls(Sue ware) 2▽Lids(Sue ware) 2
⑤	*484*	Hachioji	Medieval	▽Coins
⑥	*513*	Inagi	Medieval	▽*Itabi*(medieval steles) 3▽*Gorin-To*(miniature stone pagodas) 3
⑦	*450*	Tama	Jomon	▽Pottery 1
⑧	*753*	Tama	Jomon	▽Shallow bowls 4▽Deep bowls 4▽Clay earrings 5▽Clay bead 1▽Stone earrings 3▽Stone earring(unfinished) 1▽Stone beads 2▽Stone beads 3▽Arrowheads 2▽Stone awl 1▽Tanged scrapers 2▽Point 1▽Chipped stone axe 1▽Polished stone axes 2▽Pebble tools 2▽Utilized Pebbles 3▽Quern 1
⑨	*72・795・796*	Hachioji	Jomon	▽Shallow bowl 1 ▽Deep bowls 19
⑩	*57*	Tama	Jomon	▽Pottery 6

今回展示した考古資料は、すべて東京都教育委員会が所蔵しています。

All the exhibits are owned by Tokyo Metropolitan Board of Education.

プロローグ

ニュータウンと遺跡調査

地面の下に眠っている遺跡たちは、建物や道路をつくるための工事によって壊されてしまうことがあります。そのような時、遺跡の記録を後の時代に伝えるために発掘調査が行われます。多摩ニュータウンがつくられる際にも、たくさんの発掘調査が行われました。

4市にまたがる計画都市・多摩ニュータウンの範囲からは、最終的に964カ所の遺跡が見つかり、そのうちの770カ所ほどが発掘調査されています。この地は近代的な開発の手が及んでおらず遺跡の残りがよかったことに加え、広大な範囲を綿密に1つの調査組織が発掘調査する機会に恵まれたため、新たな知見を数多くもたらしました。

Within Tama New Town, which spans across four cities, a total of 964 archaeological sites have been found, and approximately 770 of them have been excavated.

This area had been fortunate enough to have avoided modern development, which had allowed for a significant number of well-preserved archaeological sites to be discovered over a vast area.

Additionally, due to the opportunity provided by a single survey organization to conduct detailed excavations, numerous new discoveries have been made.

読売新聞　昭和52（1977）年10月15日付

多摩ニュータウン遺跡群

所在地：八王子市、町田市、多摩市、稲城市にまたがる
面積：2,984ヘクタール
調査期間：昭和41年～平成17年

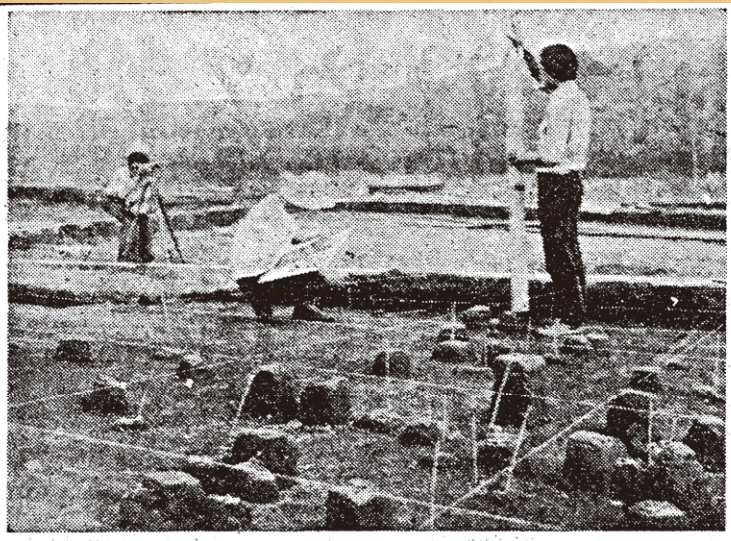
Location.
Spanning Hachioji, Machida, Tama and Inagi cities
Area.
2,984 ha
Excavation.
1966-2005

遺跡百年戦争

多摩ニュータウン

<9>

無傷で残る先人の跡



ニュータウンの遺跡は、破壊されずに残り、先人の生活を知る上に貴重

総合解明に絶好

ここで多摩丘陵の遺跡群の学術的な価値について触れておく。考古学研究の立場からみて、最も恵まれたことは、ニュータウンの開発が行われるまで、過去に虫食い開発がなく、遺跡が手つかずのまま残されていたことだ。

平たん部もほとんどが畑地であった。たて穴住居や炉穴は関東ローム層に刻まれているから表土によって保護されてきた。このため、単に個々の遺跡調査だけにとどまらず、丘陵に住んだ先人たちの生活ぶりを総合的に解明する「地域研究」の絶好の場になっている。

狩猟技術の一端も

遺跡は、尾根の頂や斜面、あるいは開けた台地などに点在する。住居の形式はたて穴式が圧倒的に多いが、中には住居跡がわずか一、二カ所の遺跡や、住居とはいえないキャンプの跡らしいものもある。縄じて縄文（じょうもん）早期の遺跡の規模は小さく、古代人が一カ所に定住することなく、ひんぱんに移動したことを物語っている。しかし、中期になると、出土した土器の種類などから何世代にわたっての定住生活をうかがわせるものも出ている。

価値

遺跡調査会では、一応遺跡を（A）平たん部にあって各時代ごとに集落ができた（B）小、中規模で主に尾根筋などにある（C）一、二カ所程度の住居跡しかない（D）土器類や墓地、祭場などだけ――の四つのタイプに分類している。

遺跡群を、これまでにわかった範囲内で、時代別に分けてみし穴らしきものも発見され、ると――。

七つの時代に分類

狩猟技術の一端をのぞくことができ、矢じりに使用された黒曜石は、長野県の和田峠、箱根、伊豆が産地だっただけに、すでに物流が始まっていたことも推定される。

また、No.52、No.283遺跡では、住居跡中央から炉が発見され、縄文早期の住居は炉は持たないという通説を覆した。

縄文時代の早期九十七、前百五十四、中期百五十三、後期十三、弥生（やよい）時代九、古墳時代以後二百二十九となっている。このように、時代を追って遺跡の増減を見ると、縄文の中期まで繁栄した社会が、後期から弥生時代にかけ、急速に衰退して行ったことがうかがえる。その原因はなんだったのだろうか。

食糧獲得技術の発達によって、乱獲が起き、食糧資源の枯渇を招いたとの説や気候異変があったとする人もいる。

この傾向は、関東の平野部全体に見られるが、多摩丘陵の場合はそれが鮮明に浮き彫りされているところが学術的には一層興味深いものとなっている。

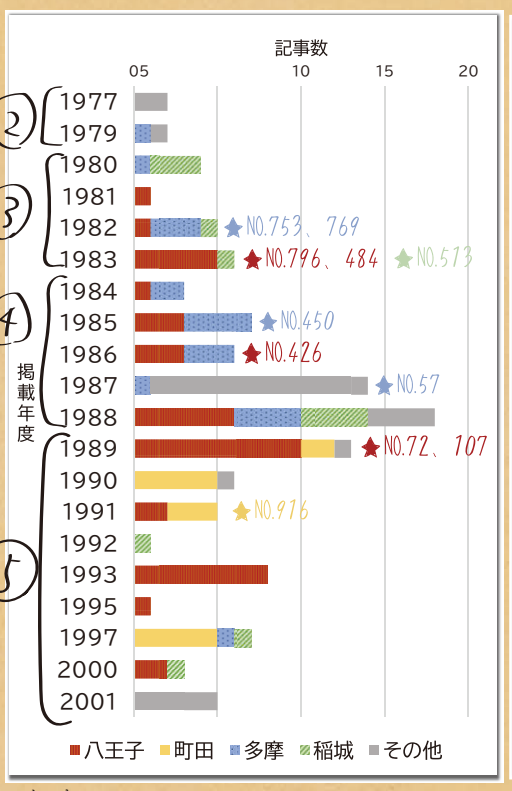
◇土偶　No.300遺跡、No.520遺跡などから出土している。長さ五、六㌢ぐらいの中くらいの大きさのものが多い。頭の半分が欠けたり、左腕がなかったりして完全な物はなく、呪（じゅ）術に使われたとの見方が強い。

出土品紙上展

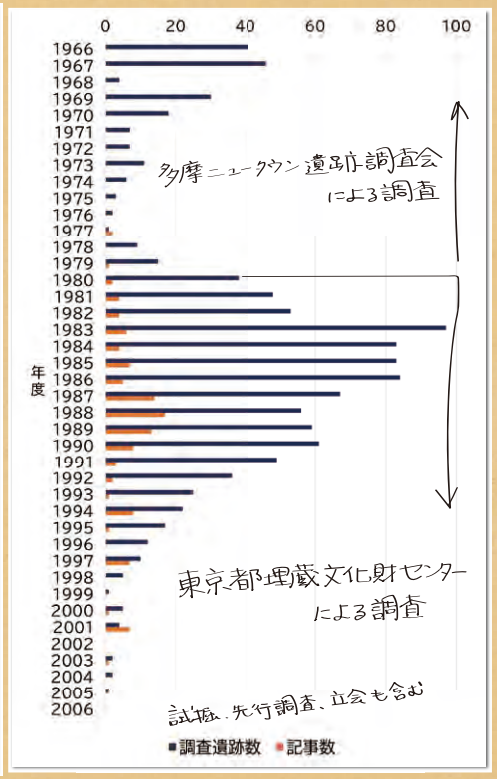
記事にのった多摩ニュータウンの遺跡

調査遺跡数の多い1980年代の後半から1990年代の前半には、多摩ニュータウン遺跡群の埋蔵文化財に関する新聞記事数も増加している。

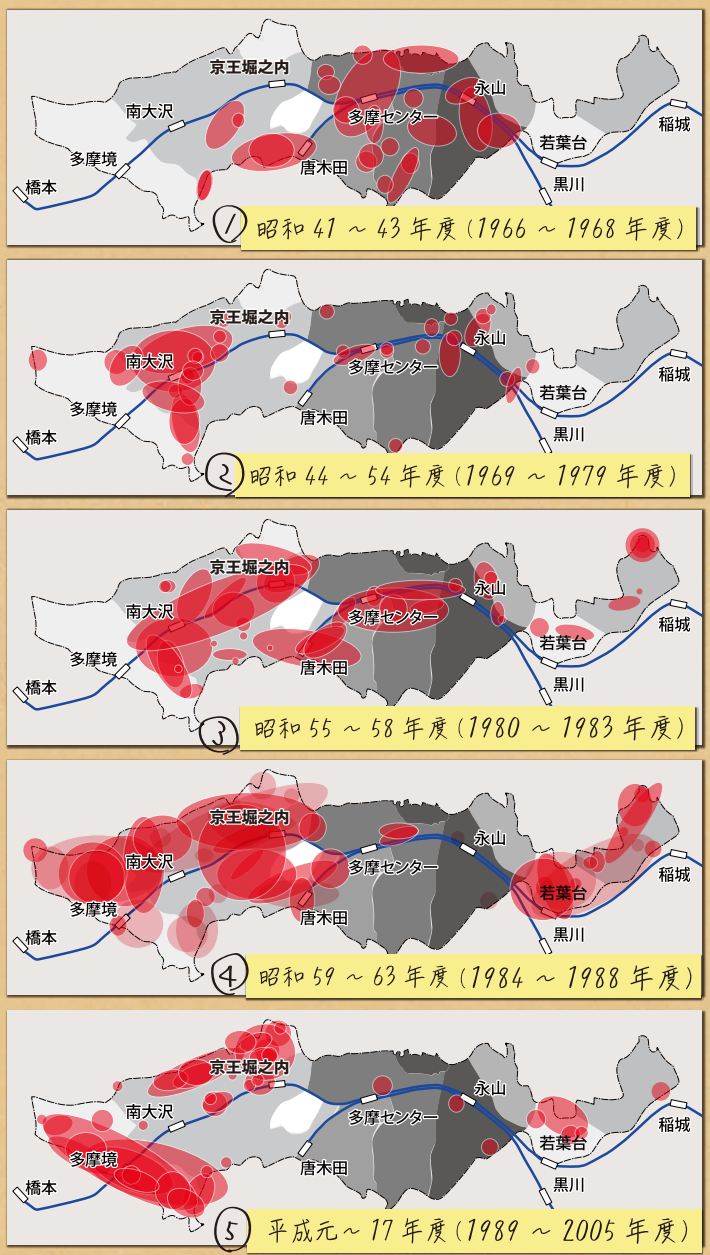
当展示では、新聞記事に複数回取り上げられたことのある、当時としても注目度の高かった遺跡のほとんどを紹介するが、その多くはこの時期に記事にされたものだ。



地域別埋蔵文化財記事数
★ 当展示で取り上げる遺跡の番号を記した。



多摩ニュータウン地域での調査遺跡数と埋蔵文化財記事数（当センターデータベースより）



多摩ニュータウン事業の展開と遺跡調査を行ったエリアの関係

発掘調査が行われたエリア（赤色で示した）を、多摩ニュータウン事業展開図に重ねた。調査したエリアの傾向ごとに複数年度をまとめている。（多摩ニュータウン事業展開図 引用元：文献1）

多摩ニュータウン遺跡の番号

多摩ニュータウン遺跡群の各遺跡には、発見された順に1から964の番号が振られており、「多摩ニュータウンNo.72遺跡」のように呼称する。当展示では「多摩ニュータウン」を略し、単に「No.72遺跡」のように表示する。

多摩ニュータウン遺跡群の調査成果に基づく研究

冒頭で述べたように、多摩ニュータウン遺跡群は残りのよい遺跡が多かったことと、広域調査を行った点において考古学研究に新たな知見をもたらした。前者については次ページ以降の解説に預け、ここでは後者の事例について紹介する。

縄文時代の狩猟空間

さらに広域な遺跡間の関係を対象とした研究として、狩猟空間の研究がある。多摩ニュータウン遺跡群からは、イノシシなどの獣を獲るためと考えられる縄文時代の陥し穴がたくさん発見されている。広域調査を行ったために、陥し穴を掘る場所と地形の関係をも考察することができた。

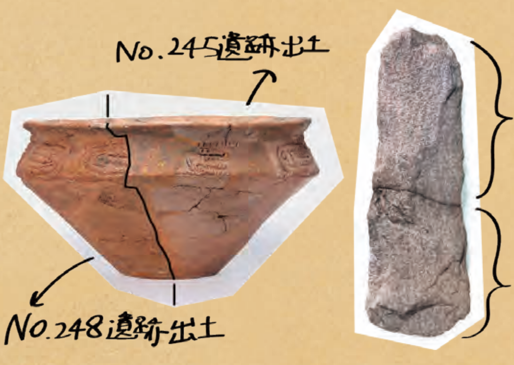
陥し穴土坑は傾斜が緩やかで深い谷による開析が進んだ、川の南側斜面に多い。特に河岸段丘面と、ふところの深い谷の谷頭近くに集中してつくられている。

どちらも穴の形態による分類や、穴を埋めていた土に差がないため、ほとんど同時期に使用されたものと考えられる。（参考：文献3）

縄文時代の粘土採掘場と土器製作場

町田市小山ヶ丘では、縄文時代の大規模な粘土採掘場（№２４８遺跡）が見つかった。その規模は調査された範囲だけでも2，405㎡。少なくとも635トンもの粘土が千年以上にわたり発掘されていたと考えられている。丘の斜面をすべて剥がすような広域調査のために、その広大さを確認することができた。

丘のふもとの集落跡（№２４５遺跡）からは縄文土器の製作現場が見つかっており、ここで見つかった土器のかけらと半分に割れた石器は、なんと粘土採掘場で見つかったものの一部だった。このことから2つの遺跡を当時の人びとが行き交っていたことは間違いなく、当時の土器づくりの実態を粘土採掘から製作現場まで追うことのできる貴重な事例となった。（参考・文献2）



２つの遺跡間で接合した浅鉢と打製石斧

多摩ニュータウンは狩猟場だった

住居から出稼ぎ？ イノシシなど現地解体

東京都埋蔵文化財センター

縄文の落とし穴5400基

東京の多摩ニュータウンがある多摩丘陵で、縄文時代の「落とし穴」が計五千四百基も見つかり、同丘陵全体が同時代最大の狩猟場だったことが、都埋蔵文化財センター（水上忠理事長）の十二日まで七年間の発掘調査でわかった。落とし穴は東日本を中心に分布しており、神奈川県内の遺跡で約百基出土したなどの例はあるが、今回のように多いのは全国でも初めてという。考古学の専門家は、縄文人の狩猟形態や範囲を解明する手がかりとして注目している。

多摩ニュータウン遺跡群で見つかった落とし穴の断面。指さしている点線部分が「ピット」（棒を立てた部分）

発掘された落とし穴は、いずれも長円形（長径平均二㍍、短径同一・五㍍）。深さ一－一・五㍍でほぼ垂直に掘られている。穴の底部には棒状のものを埋め込むようにした「ピット（下部施設）」があり、ピットには棒を土中に打ち込んだのと、一つの穴を掘って五－十本の棒を立てて根元を押し固めた――とみられる二つのタイプがあった。

これらは、同センターがニュータウン建設に伴い五十五年度から調査している三千㌶（多摩、稲城、町田、八王子の四市にわたる）地域内に八百八十三ある多摩ニュータウン遺跡群（延べ三百五十㌶）に散在し、多くは丘陵の尾根と谷を結ぶ急斜面に谷を取り巻く形で集中、五十㍍四方に六十－七十基ある所もあった。

縄文期の落とし穴は、昭和四十年に長野県・蓼科山ろくで初めて見つかり、四十五年には横浜市・霧ケ丘遺跡で百十六基が発見された。その後も北海道、東北や関東各地で見つかっており、縄文期にイノシシや小動物をとるためにとがった棒を立てた穴というのが定説となっている。

多摩丘陵でも、縄文時代の貝塚からシカやイノシシの骨が多く出ている。落とし穴は一緒に出土した土器などから、縄文早期末（六千五百年前）から同前期前半（五千五百年前）の比較的短い時期に限られることがわかった。同センターでは「穴を掘る労力や狩猟効率の問題から、前期以降は勢子（せこ）を使う待ち伏せ猟や、はねワナなど進歩した形態に変わっていったのでは」という。

また、この地域には落とし穴が掘られたのと同時期の住居跡はこれまで見つかっておらず、近いところでも約十㌔北方の国分寺市内で見つかっただけ。しかし、尾根筋には同時期の炉穴（半径約一㍍）が点々と出土しており、同センターは「現地で解体加工して集落に持ち帰ったのではないか」とみている。発掘は約半分が終了した段階で落とし穴の数は増える見通し。

東大文学部考古学研究室、今村啓爾助手の話　五千四百基もの落とし穴が出土したのは、地域が広いとしても全国的に例がない。発掘もきめ細かく行われており、広い視野で縄文時代を考えるための貴重な資料だ。縄文人が狩猟の場と生活の場を分けていたかなど、解明が期待できる。

多摩ニュータウン　東京都　八王子　多摩丘陵　町田　横浜市　神奈川県

毎日新聞　昭和62(1987)年5月13日付
※記事レイアウトを変更している。

斜面一帯に掘られた陥し穴（№.106遺跡 文献4）

① No.769遺跡

所在地：多摩市豊ヶ丘一丁目
調査期間：昭和56年6月29日～昭和57年12月24日
時代：旧石器時代、縄文時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献5

Location. Toyogaoka, Tama City
Excavation. Jun.29th,1981–Dec.24th,1982
Period. Paleolithic, Jomon, Nara, Heian, Middle Ages, Edo

旧石器時代の礫群発見

旧石器時代の遺跡で、キャンプしたあとのように焼けた石が集まる事例がいくつも見つかることは、今となっては珍しいことではない。しかし大規模調査が少なかった当時、この発見は多くの研究者の注目を集めた。この遺跡では炭や石器の集中した箇所も発見され、人々の活動を示す痕跡は76箇所にも及んだ。多くの人に〝大団地〟をも連想させるこの成果は、学問的にも「少人数で放浪」していたという旧石器時代の強いイメージに一石を投じた。今では、この周辺にも多くの旧石器時代遺跡の存在が明らかとなっている。

多摩ニュータウン
旧石器時代にも〝大団地〟
炊事跡8ヵ所も
関東最古の遺跡　初めて石皿も発掘

東京都埋蔵文化財センターは、十七日までに東京・多摩ニュータウンの住宅・都市整備公団の住宅建設予定地から関東地方では最古とみられる二万五千年以上昔の先土器（旧石器）時代の遺跡を発掘した。この遺跡から炊事に使ったとみられる焼け石群が八カ所も見つかっており、旧石器時代人の集団はかなりの大人数だった可能性が出てきた。また、これまで縄文時代以降のものと考えられていた石皿がみつかるなど、なぞに包まれている日本の旧石器時代人の生活状態を探る重要な手がかりになりそうだ。

多摩ニュータウン769号遺跡、中央の円内が焼礫群が出土した地点㊤と確認されたものとしては日本初の旧石器時代の石皿

生活解明へ道

同期視は疑問

東京新聞
昭和57(1982)年7月18日付

It is not uncommon to find clusters of burned stones in Japanese Paleolithic sites, similar to those left behind after camping. However, at the time when large-scale excavations were scarce, this discovery garnered the attention of many researchers.

At this site, concentrations of charcoal and stone tools were also found, with traces of human activity appearing in as many as 76 locations. This result, which reminds many of a “large residential area,” challenged the strong image of the Paleolithic period as being characterized by “small groups of wanderers.”

Nowadays, the presence of many Paleolithic sites in the surrounding area has also been confirmed.

遺跡の位置

遺跡は、当センターに併設する遺跡庭園「縄文の村」（No.57遺跡）から東の谷を挟んだ対岸に位置する。調査後の跡地には、現在豊ヶ丘団地の一号棟が建てられている。

Google Earth より（一部改変）

No.769 遺跡出土台石と磨石

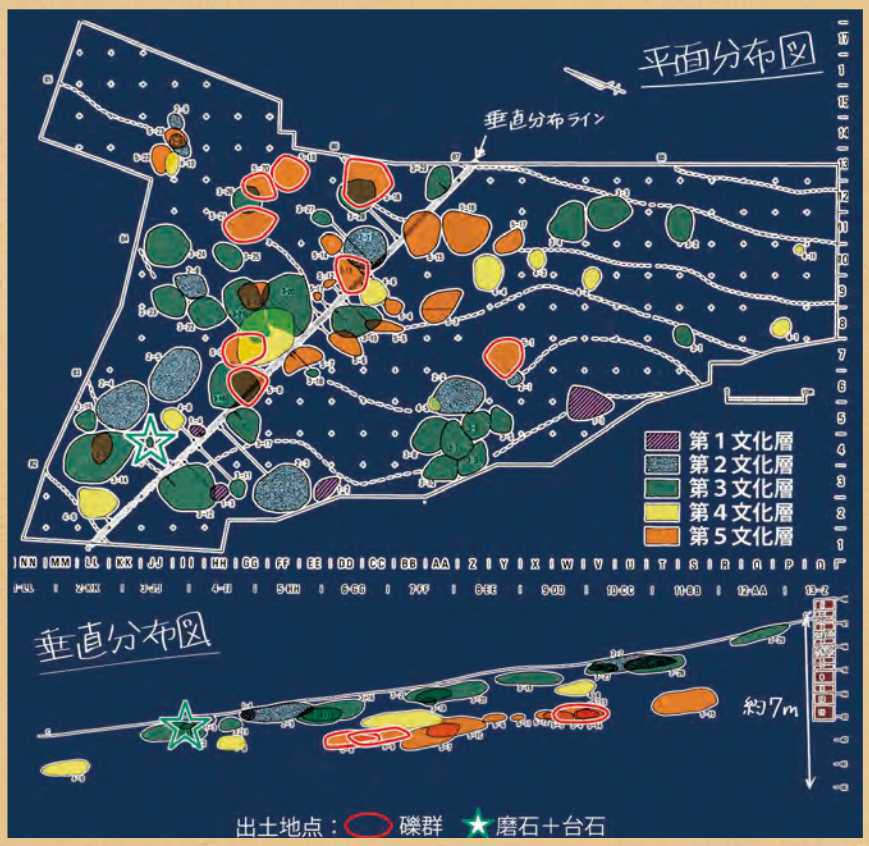
記事では「石皿」とあるが、学術的には、この用語は縄文時代のものを指す。「台石」は、石皿のような使われ方をした可能性がある旧石器時代の石器。「磨石」は石皿や台石の上でものを磨る道具だ。

遺跡現況（記事内の写真の範囲）

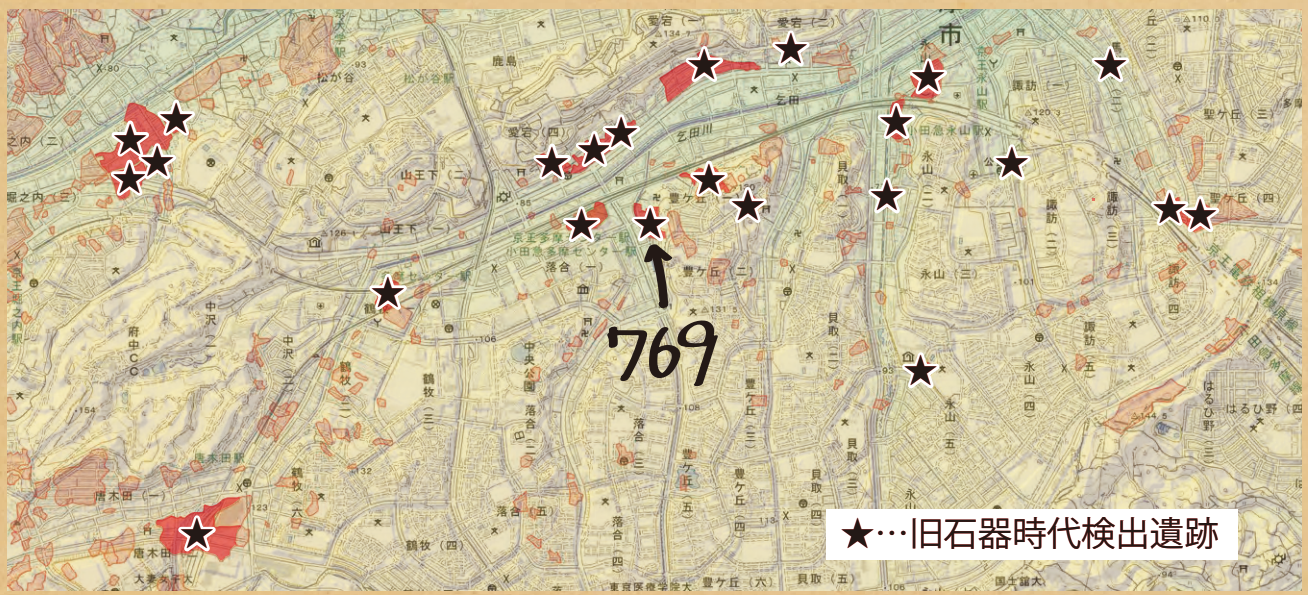
当時の地形をほぼ活かして開発されたこの土地は、旧石器時代の古くから人々が集まる恰好の場所であったことがうかがえる。

No.769遺跡を遺した人々の活動

この遺跡では、遺物の出土層位と石器のまとまりごとの内容（組成）により、5つの時期（文化層）にわたって連綿と人々の活動が行われていたことがわかった。特に注目を浴びた8箇所の礫群は、本遺跡で最も古い第5文化層で検出された。この痕跡は、一度に残されたものなのか複数回にわたる結果であるのか。あるいは一つの集団がのこしたのか複数の集団の存在もありうるのか。痕跡が遺される過程と集団行動についての問題は、周辺調査事例を巻き込み、旧石器時代研究の大きな課題の一つとして今も議論されている。



礫群と磨石＋台石の出土地点



周辺の旧石器時代検出遺跡　※東京都遺跡地図情報インターネット提供サービスと国土地理院地図を重ねて作成

② No.426遺跡

所在地：八王子市堀之内
調査期間：昭和60年8月1日～昭和61年8月8日
時代：旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献6

Location. Horinouchi, Hachioji City
Excavation. Aug.1th,1985–Aug.8th,1986
Period. Paleolithic, Jomon, Yayoi, Kofun, Heian, Middle Ages, Edo

最大級の尖頭器

「関東で最大の尖頭器」と報道され、この遺跡に光があてられることとなったのは、昭和61年11月21日のことだ。大型尖頭器は別の遺跡（No.27遺跡）でも見つかっていたが、それを上回る大きさで記録を更新した。この後も各地で多くの遺跡調査が現在まで行われているものの、今もなお関東最大級の肩書きは変わっていない。

また一方では謎の多い石器でもある。なぜこのような大きさが必要だったのか。なぜこの場所で作られたのか。何に使おうとしていたのか。そもそも本当に使おうとしていたのか。抱える問題も最大級である。

遺跡の位置 Google Earth より（一部改変）

This artifact, dubbed as 'the largest pointed stone tool in the Kanto region,' gained attention when it was discovered at this archaeological site on November 21, 1986.

Although a large pointed stone tool had been found at another site (Site No. 27), this was an even larger one.

Since then, numerous archaeological excavations have been conducted in various places, but the title of the largest in the Kanto region remains unchanged.

On the other hand, it is also a mysterious stone tool. Why was such a large size necessary? Why was it made at this location? What was it intended for? Was it actually meant to be used at all? The problems it poses are also significant.

61. 11. 21. 毎日

関東で最大の尖頭器

多摩ニュータウン予定地で発掘

通常の3倍 短剣に利用？

「NO426遺跡」で見つかった長さ二十四㌢の尖頭器。右が先頭部

財団法人・都埋蔵文化財センターはこのほど、八王子市堀之内二四三八の多摩ニュータウン建設予定地の「NO426遺跡」で、縄文草創期のものとみられる長さ二十四㌢の尖（せん）頭器を発掘した。以前、千葉県で見つかった二十一・五㌢のものをしのぐ関東地方最大のサイズ。北海道以外で二十㌢以上の尖頭器の出土は珍しく、考古学関係者は「縄文草創期の文化の一端を解き明かすカギになる」と興味を寄せている。

この尖頭器は、同ニュータウンの遺跡群から出土した各種尖頭器三十点のうちの一点でほぼ完全な形。縄文草創期（約一万二千年前）のものと推定される。幅七・五㌢、厚さ二・五㌢で重さ約四百㌘。材質はチャート石（火山岩）。十㌢前後の尖頭器三点とともに発掘され、周囲に削り取られたチャート石の破片がいくつも散らばっていたことなどから、何らかの目的で、埋蔵した可能性が強いという。

これまでの調査では、北海道・今金町の美利河遺跡で五十八年に出土した長さ三十三㌢の尖頭器が日本最大。関東地方では、四十一年に千葉県松戸市の強清水（こわしみず）遺跡で見つかった長さ二十一・五㌢のものが最大。

尖頭器は、木の棒をつけるなどして石やりに使ったとされるが、通常よりも約三倍長い尖頭器がなぜ作られたかについてはなぞが多い。発掘にあたった同センターの館野孝調査員は①祭礼などの儀式の道具として使った②木のツルなどを片側の先端に巻いて短剣として利用した③一般的な使い方と同様に石やりとして用いた――をあげている。

毎日新聞　昭和61(1986)年11月21日付　※一部レイアウトを変更している。

尖頭器とは

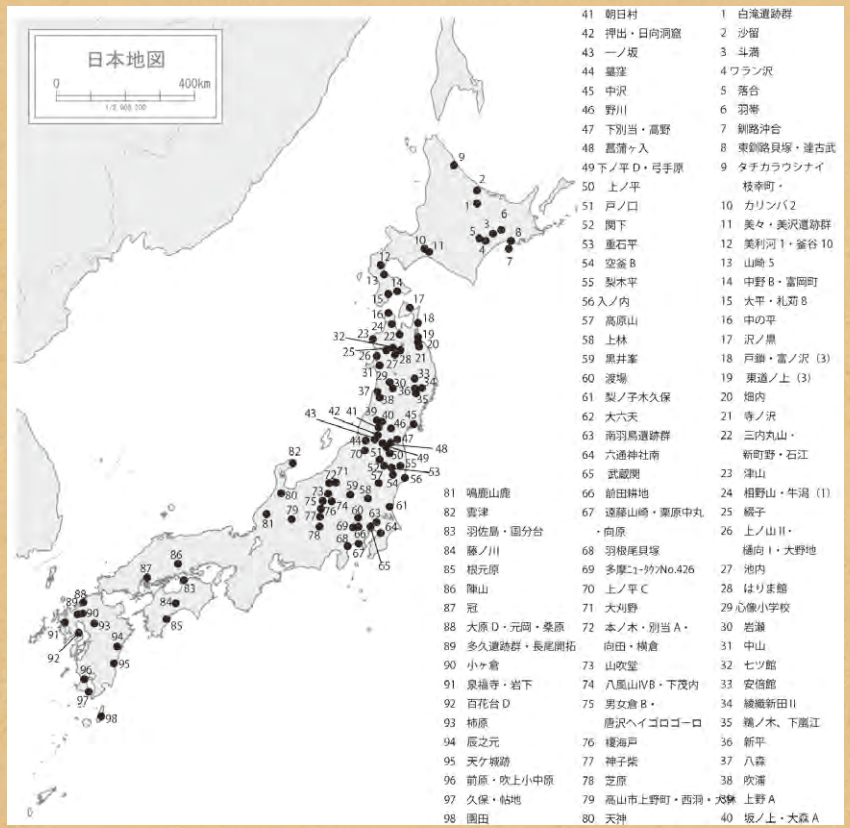
尖頭器は先端を鋭く尖らせ木葉形に製作された石器で、槍に仕立てて大型の獣を狩っていたと考えられている。全国的に一般的な平均サイズは10㌢に満たないものが多いが、稀に18㌢を超える「大型尖頭器」が発見されることもある。

この石器の問題は多岐にわたり、大きな獣には大きな武器をというには、重さの点で扱いにくく、数も少ない。また、使用とメンテナンスの繰り返しの結果として大型から小型化したという説や、優美で圧倒的存在感から威信財とする説などもある。一方素材の点でも、豊富に入手できる産地に遺跡が限定されているわけではない。いずれにしても、いまだに答えは見つかっていない。

後期旧石器時代後半期の狩猟対象獣

（引用元：文献７）

記事になった№426遺跡出土の尖頭器



大型尖頭器出土遺跡の位置

（引用元：文献９）

未製品ではあるものの長さ44・7㎝、重量4・4㎏を測る国内最大級の尖頭器である。石材には頁岩が用いられている。

北海道今金町美利河１遺跡の超大型尖頭器

（引用元：文献８　巻頭カラー図版）

No.③ No.916・917・918遺跡

古墳時代の住居の祭祀

相模野台地を見渡す丘陵の西端で発見された大規模な集落遺跡。竪穴住居跡60軒超に加え方形周溝墓2基も検出された。弥生時代末、それまで何もなかった場所に集落が突如現れ、古墳時代のはじめにはまた忽然と姿を消した、その理由については未だに解明されていない。遺跡は下の地図に示した通り、広い範囲に広がっていたが、その後の大規模な造成によって、当時の様子を想像することは難しい。

This large-scale settlement was discovered at the western edge of the Tama hills, overlooking the Sagamino Plateau.

In addition to the remains of over 60 pit-houses, two *hokei-shukobo*(square-shaped moated burial precincts) were also uncovered. The settlement appeared suddenly at the end of the Yayoi Period, and then disappeared again at the beginning of the Kofun Period.

The site was spread over a wide area, from the south of One Ryokudo greenway to near the Starbucks Coffee and a large sporting goods store. However, the subsequent large-scale land development has made it challenging to envision what the area may have looked like in the past.

所在地：町田市小山ヶ丘二・三丁目
調査期間：916遺跡　平成3年4月1日～平成4年3月31日
917遺跡　平成4年11月18日～平成4年3月31日
918遺跡　平成3年7月13日～平成4年3月31日
平成4年4月4日～平成4年8月7日
時代：旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献10

Location.
Oyamagaoka, Machida City
Excavation.
No. 916 Site Apr. 1st, 1991–Mar. 31st, 1992
No. 917 Site Nov. 18th, 1992–Mar. 31st, 1992
No. 918 Site Jul. 13th, 1991–Mar. 31st, 1992
Apr. 4th, 1992–Aug. 7th, 1992
Period.
Paleolithic, Jomon, Kofun, Nara, Heian, Medieval, Edo

多摩NT No.916遺跡

古墳時代、関東最大級の集落

村長クラス方形周溝墓２基

多数の竪穴式住居跡を発掘

来月7日に一般公開

多摩ニュータウンの遺跡を調査している都埋蔵文化財センター（多摩市落合）はこのほど、町田市小山町の遺跡群の一角から古墳時代前期（四世紀初め）の方形周溝墓二基と多数の竪穴式住居を発掘した。これまで竪穴式住居はあったが、同墓は一基しか見つからず手掛かりが乏しかっただけに今回の発掘で同センターは「これまで発掘された中では関東地区最大級の古墳時代の集落であることがはっきりした。複数の墓を調査することで同時代の集落の解明がかなり進みそう」と話している。この遺跡は十二月七日に一般公開される。

二基の方形周溝墓と住居跡が見つかったのは多摩ニュータウンナンバー・916遺跡（同市小山一七）。京王相模原線・多摩境駅の東側にあたる。多摩丘陵では縄文や奈良・平安時代の遺物は多く見つかっているが、古墳時代のものは三年前に小山町で九㍍四方の方形周溝墓一基がみつかり、その後周辺の発掘が行われていた。

調査では五遺跡分の広さ一㌔四方で古墳時代のものと思われる土師器（はじき）や砥石（といし）などが多く出土。さらに今年になって一㌔四方のほぼ中央部から、六㍍と八㍍四方の同墓二基と、大量の高坏（たかつき）やかめを伴った十八軒分の竪穴式住居跡がかたまって発見された。これについて石井則孝同センター調査部長は「墓の中の装飾品などから今回見つかった二基は、三年前に発掘されたものと同様、村長クラスの墓と推測される。十八軒の住居跡がひとまとまりで発見されたのはこの地域では初めてで、村落の全体像がこれで明らかになるのではないか。古墳が造られ始めた当時の多摩丘陵の開発を知る貴重な手掛かりにもなる」と解説、「一㌔四方に古墳時代の住居跡と墓が点在しているのは関東地方でも最大級といえる」と話している。

同センターは十二月七日、一般の人を対象に916遺跡の見学会を開く。申し込みは不要で同日午後一時半に多摩境駅下車徒歩二十五分の同遺跡へ集合。小雨決行で参加費無料。乗用車は利用できない。問い合わせは同センター＝電0423（74）8044＝へ。

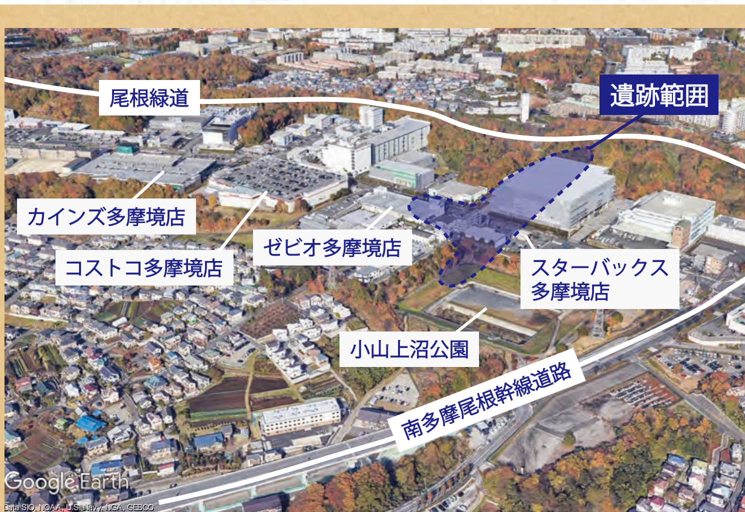
竪穴式住居跡を観察するセンターの職員

竪穴式住居跡から見つかった高坏やカメ＝いずれも町田市小山で

東京新聞
平成3(1991)年
11月29日付

遺跡の場所

現在、遺跡周辺には大型施設・店舗が立ち並ぶ。尾根緑道に沿って残っている丘陵地形は、本来は遺跡範囲まで広がっていたが、開発工事によって削られている。



Google Earthより（一部改変）

（上）住居跡群の空撮写真（手前が北）
（左）13 号住居跡の平面図（上が北）

土器集中出土　住居廃絶祭祀か

右ページに掲載した記事中で使われているのは、遺跡南側で見つかった13号竪穴住居跡の写真。北壁付近で土器が集中して出土した様子が写されている。

土器の一部を意図的に打ち欠き、またそれを組み合わせて置いた様子などから、日常使用していたものがその位置に残っていたわけではなく、住居を捨てて去る際の祭祀に使われたものと考えられる。

13 号竪穴住居跡北壁付近の土器出土状況

出土状況から推定される元の並べ方

④ No.107遺跡

所在地：八王子市松木
調査期間：第1～8次　昭和53年4月24日～平成元年12月22日
時代：旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献11

平安時代の木器出土

大栗川と大田川の合流地点にある遺跡。二つの川に挟まれた台地上には旧石器時代から人が居住し、戦国時代には当地の有力武士である大石氏が館を構えた。奈良・平安時代にも集落が築かれ、隣接する谷で見つかった水場遺構からは、多量の木器が出土した。「官」等の文字の書かれた木器・土器の存在から、国府などと関係の深い人物が住んでいた可能性も考えられる。遺跡のあった場所は削られてしまっているが、隣接地には古い石仏や石塔、樹齢400年を超えるサルスベリが残り、中世の面影を偲ばせる。

1989.8.2 毎日（木）

平安初期の木器120点

八王子で出土 「官」「位」などの焼き印文字

東京都八王子市の多摩ニュータウン内にある複合遺跡から約千二百年前の平安時代初頭のものとみられる皿などの木器約百二十点が出土したことが一日、明らかになった。木器には、「官」「位」などの文字が焼き印などで記されているものも含まれ、この時期の木器がこれ程大量に見つかったのは全国でも例がない。付近では地位の高い階層のものとみられる住居跡も発掘されており、東京都埋蔵文化財センターは、この地域に古代の木器生産に携わった土豪が存在したとみている。

出土地点は同市松木の多摩川支流の大栗川中流に近い河岸段丘の谷地。谷底の約二〇平方㍍の湿地の中に埋まっていた。木器は、トチノキ製とみられる挽物（ひきもの＝ろくろで挽いて作った器具）の皿や、台脚つきの盆、蓋（ふた）など約六十枚（直径一六―二五㌢）のほか、ヒノキ製とみられる曲げ物（薄い材を丸く曲げ底を取りつけた容器）や、建築材、弓など。皿や盆には、「全」「官」などの文字を焼き印したのが八点、ナイフ状のもので「位」などの文字を線刻したのが六点（文字はいずれも約二㌢角）あった。

一緒に、出土した須恵器にも「位」「全」などの文字を書いた墨書土器約三十点が見つかっており、木器の製作年代は、八世紀末から九世紀中ごろにかけてとみられる。

同センターは、文字が何を表しているかは不明としているが、①出土地点からは加工中の木材や削り取った木片なども出ている②谷の上の段丘では当時の位の高い人が住んだ掘っ立て柱の建物の遺構が二棟分発掘されている③当時の官庁だった武蔵国府があった大国魂神社（府中市宮町）から約十㌔しか離れていない――ことなどから「木器生産に関係し、文字を知り、武蔵国府とも深いかかわりを持つ在地土豪が一帯に住んでいた」と推定している。

毎日新聞
平成元（1989）年
8月2日付

多摩ニュータウンで大量に出土した皿などの木器

遺跡の場所

Google Earthより（一部改変）

The site is located at the confluence of the Oguri River and the Ota River. The small rise between the two rivers has been inhabited since the Paleolithic period, and during the Sengoku period(approximately mid-15c to 16c), the Oishi family, a powerful warrior clan in the area, established a residence there.

In the Nara and Heian periods, a settlements was also built, and a large amount of wooden vessels were excavated from the remains of a waterhole found in the adjacent valley. The presence of wooden and earthenware vessels with characters such as *kan* (government official) suggests that someone closely related to the provincial government of Musashi* may have lived in the area.

Although the area where the site was found has been cleared away, a 400 year old crape myrtle tree still stands in the nearby area, inviting us to reminisce about the medieval period.

*the province which today comprises Tokyo Metropolis, most of Saitama Prefecture and part of Kanagawa Prefecture

Location.
Matsugi, Hachioji City
Excavation.
1st–8th
Apr. 24th, 1978–
Dec. 22nd, 1989
Period.
Palaeolithic, Jomon, Kofun, Nara, Heian, Medieval, Edo

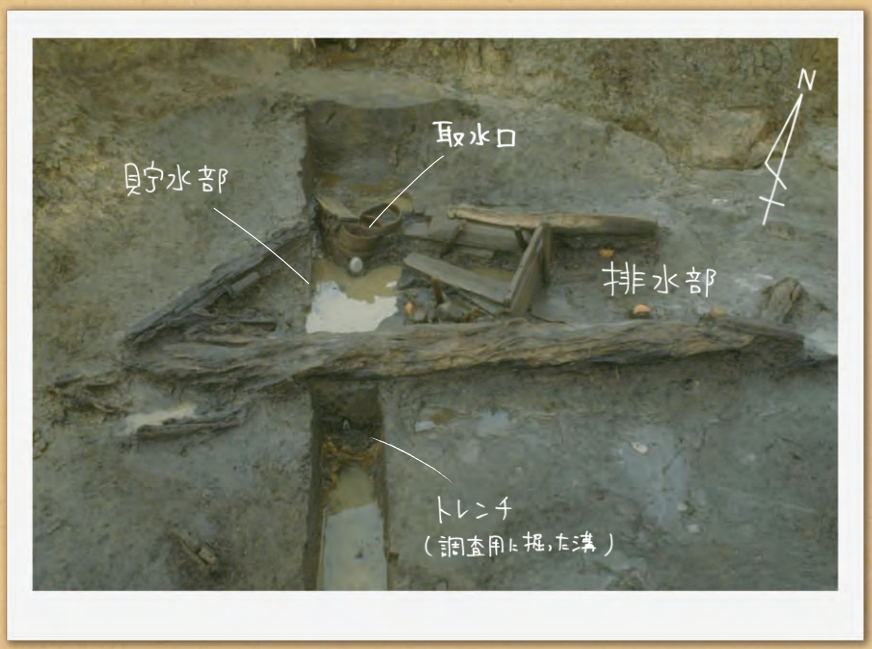
古代水場遺構　大量の遺物を検出

古代の水場遺構は木を組み合わせた貯水部と、貯めた水を外に流すための排水部からなる。

貯水部北西部に重ねられた曲物を通して取水し、また、南側の平坦面は何らかの作業場として使われていたと見られる。

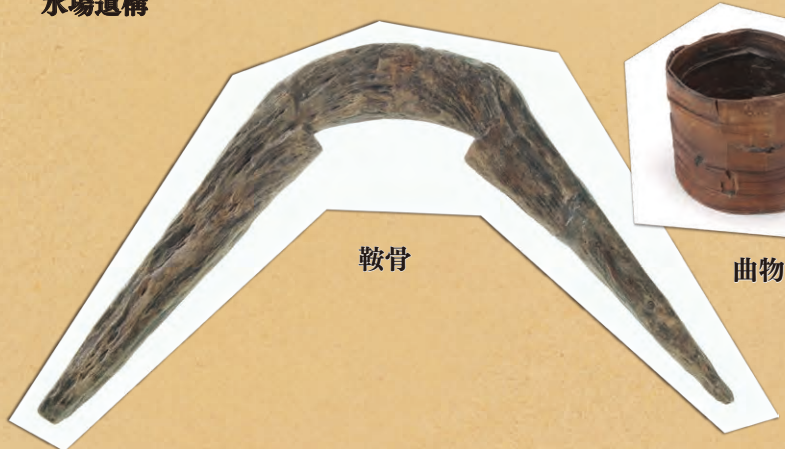
出土遺物から、8世紀後半に作られ、9世紀中頃に使われなくなったものと考えられる。なお、古代の遺構の下に、古墳時代の水場遺構も検出されている。

奈良・平安時代の水場遺構からの木器等出土状況



水場遺構

水場遺構　取水口　拡大



鞍骨

曲物

木器・須恵器

※縮尺不同

⑤

No.484遺跡

所在地：八王子市南大沢220、225、232他
調査期間：昭和58年9月5日～12月26日
時代：縄文時代、弥生時代、平安時代、中世
発掘調査報告書：文献12

Location.
Minami Osawa, Hachioji City
Excavation.
Sep. 5th, 1983–Dec. 26th, 1983
Period.
Jomon, Yayoi, Heian, Medieval

戦国時代の大量出土銭

「古銭（こせん）2万6千枚（まい）出土」と騒がれたのはNo.484遺跡である。この出土銭は中世に掘（ほ）られた3つの穴（あな）に埋（う）められ、のちの集計では約2万7千枚にも及（およ）んだ。中国からの渡来銭（とらいせん）を中心とする66の銭種の組み合わせにより15世紀後半～16世紀初頭に埋められたと推定（すいてい）され、「戦国時代の隠（かく）し金？」とも紹介（しょうかい）された。ところがこの大量出土銭。一見すると大金にも見えるが、実際はとても戦費をまかなえるような額ではない。一体なんのために埋められていたのか、今もなお論争（ろんそう）が続いている。

The No.484 site was once widely publicized due to the large quantity of ancient coins discovered during an excavation.

The coins were found buried in three pits that were dug during the medieval period, and a subsequent count revealed that there were as many as 27,000 coins.

It is estimated that the coins were buried between the late 15th century and early 16th century.

However, while this large quantity of unearthed coins may seem like a substantial amount of money, it is actually insufficient to cover the cost of a war.

What was the purpose of burying such a large quantity of ancient coins? The matter remains unresolved to this day.

58.11.16
アサヒ.

古銭2万6千枚出土

多摩タウン 戦国時代の隠し金？

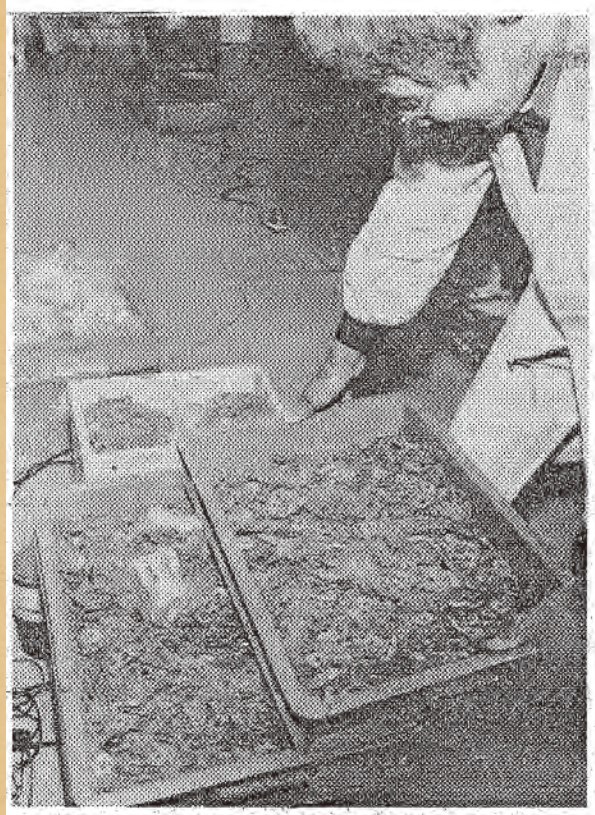
多摩ニュータウン内の八王子市南大沢地区の遺跡発掘現場で、このほど約二万六千枚もの古銭が土中から見つかった。作業にあたっている都埋蔵文化財センター（水上忠理事長）によると、一度にこれほどの古銭が出土したのは都内で初めてという。発掘場所には、こうした貨幣が発掘されるようないわれがないだけに、関係者は「戦国時代に埋められた隠し埋蔵金の一部では……」と、夢をふくらませている。

発見現場は、今春から入居が始まった南大沢団地北側に広がる丘陵地帯の頂上付近だ。一帯ではニュータウン開発に伴う事前遺跡発掘調査が九月から同センターによって行われており、古銭はその発掘作業中に出てきた。銭の穴にひもを通して約百枚を一束にした「一緡（さし）銭」と呼ばれる形のものが、はだかのまま三カ所の穴にぎっしりと埋めてあった。

現在、調査員が分類整理しているが、古銭は中国で作られ、輸入された銅銭だ。「開元通宝」から「永楽通宝」まで、唐、宋、明時代などに鋳造された約三十種が確認されている。もっとも新しい永楽銭が日本に入ってきたのが十五世紀ごろとされることから、これらの古銭が埋められたのは、室町時代から江戸時代直前までの間と、同センターでは推測する。

調査員たちが、思いをめぐらしているのが「いったいこれらのお金が、いつだれによってこの場所に埋められたか」というナゾ。同地区では、縄文時代や弥生時代の埋蔵文化財があることは以前から知られており、これまで、両時代の土器片などが見つかっている。しかし、室町時代以降に、城や豪族の館があったという記録はない。

こうした状況から、にわかに浮上したのが、「埋蔵金」説だ。現場から約一㌔北西に、小田原北条氏と姻せき関係にあった土地の豪族、大石氏の館が立っていたという記録があり、北条氏が豊臣秀吉に敗れた際に、軍資金として、大石氏がこの山に隠したのではないのか、というのだ。それを裏付けるように、昭和二、三年ごろ、今度の場所からすぐ南側の丘陵でも約一万枚もの古銭が土中から見つかっている。同センター調査課の可児通宏・研究資料担当主査は「あくまで仮説だが、まだほかにも古銭が埋まっているかもしれない」と話している。



多摩ニュータウンで大量に発見された古銭
＝多摩市諏訪の都埋蔵文化財センター収蔵庫で

朝日新聞　昭和58（1983）年11月16日付
（承諾番号 23-0176）

大量出土銭とは

「大量出土銭」とは、数千あるいは数十万枚以上もの銭貨がまとまって出土する事例で、全国各地で発見されている。

この現象は、13世紀後期から16世紀後期までみられ、甕、木箱、布袋など容器に入れて地中に埋める場合や直接土坑に埋める場合などさまざまである。また、埋める場所の決まりもなく埋め方についてはよくわかっていない。

特に最大の謎は、なぜ埋められたのかである。呪術的・宗教的な行いのために「埋納」した説と、なんらかの財源の確保を目的に「備蓄」した説の二つが議論されており、埋められた当時の社会背景や地域の事情が大きくかかわっていると考えられている。

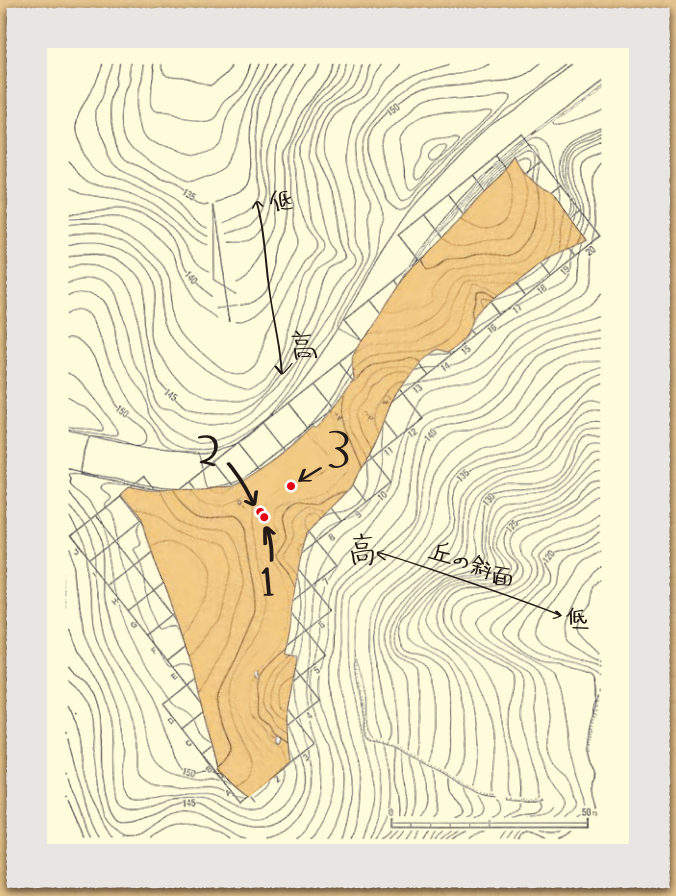
実際の出土状況

出土状況の再現

遺跡の場所　Google Earth より（一部改変）

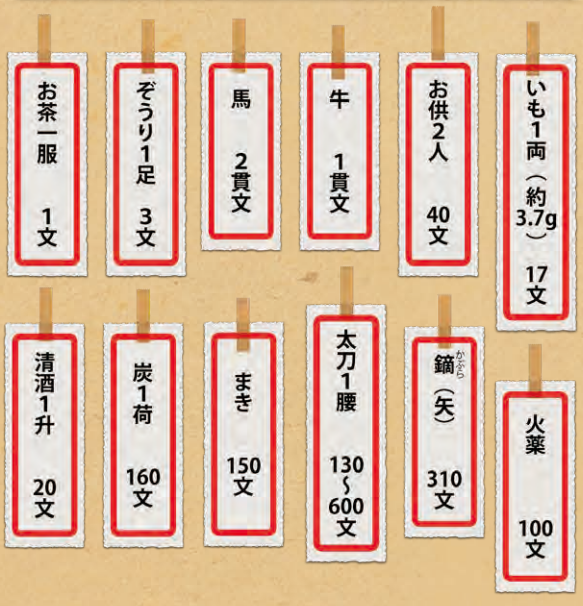
モノの物価

中世に流通した銭は、どのようなモノに一体どれくらい必要だったのか。ここでは、本遺跡の大量出土銭の時期にあたる15世紀後半頃の物価の事例について紹介する。



大量出土銭が出土した３つの穴の立地

【銭の単位】
1 枚＝1 文（約 3.75g）
10 枚＝10 文＝1 疋（約 37.5g）
約 97 枚＝10 疋＝1 連（約 375g）
約 1,000 枚＝10 連＝1 貫（約 3.75kg）
※緡銭（さしぜに）とは、銭貨の孔に紐を通して束ねたもの。



15 世紀後半頃の物価の事例（参考：文献 13）

⑥

No.513遺跡

所在地：稲城市大丸
調査期間：昭和57年4月1日～昭和59年2月28日
昭和60年4月1日～昭和61年7月10日
時代：奈良時代、中世
発掘調査報告書：文献14

Location.
Omaru, Inagi City
Excavation.
Apr.1st–Feb.28th,1982
Apr.1st–Jul.10th,1985
Period.
Nara, Middle Ages

中世の聖域

No.513遺跡の奈良時代・中世出土一括資料は、東京都指定有形文化財（考古資料）となっている。この記事が掲載された当時、この遺跡の出土資料を〝特に重要な文化財〟として指定する動きが始まった頃であり、その価値を広く知らしめる機会となった。

一方、この遺跡は場所としても重要で、死者を弔い供養する聖域であったと考えられており、記事に取り上げられた資料だけでなく板碑や五輪塔といったものも発見されている。

遺跡の場所 Google Earth より（一部改変）

The Nara and medieval period artifacts excavated from Site No. 513 have been designated as cultural heritage by the Tokyo Metropolitan Government.

The publication of this article coincided with the start of a movement for the designation, which helped to raise awareness of their value.

This site is estimated to have been a sanctuary for mourning and memorializing the dead, and in addition to the artifacts featured in the article, items such as *itabi*[*1] and *gorin-to*[*2] have also been discovered.

[*1] a medieval stele
[*2] a five-storied miniature stone pagoda symbolizing the Buddhist universe, with each level representing an element.

59.1.20 ヨミウリ

多摩ニュータウンの大丸城跡

鎌倉初期の墓発掘

第一級の資料

貴重な納骨用ツボも

多摩ニュータウンの建設用地内にある大丸城跡（稲城市大丸）の調査を続けている都埋蔵文化財センターは、十九日までに、城跡東側から鎌倉時代初期の古墓をほぼ完全な形で発掘した。中世古墓の学術調査は東京では初めてのこと。特に「常滑三筋壺（とこなめさんきんこ）」と呼ばれる納骨用のツボの発見は極めて貴重。当時の埋葬法や、物品流通を知るうえで第一級の資料と専門家も折り紙をつけており、都教委では都の重要文化財に指定するよう検討を始めた。

大丸城跡は南武線南多摩駅南側の多摩川を見下ろす小高い丘の上にあり、古墓が見つかったのは中腹の平たん地。近くの河原から運んできたとみられる百個近くの石が三ブロックに分けて地面に置かれ、墓の位置を示していた。

中央のブロックには、高さ約二十三・五㌢の「三筋壺」が完全な形で埋まっており、長さ約七㌢の小刀も見つかった。また両側には高さ約二十二㌢の「渥美の壺」と、お経を納める青銅製の経筒（きょうづつ）二点、当時の通貨の大観通宝十九枚などが埋められていた。

大丸城跡からみつかった三筋壺㊧と渥美壺

「三筋壺」は、愛知県知多半島でつくられた「古常滑」の代表的なツボで、十二世紀から十三世紀のほぼ百年間だけ身分の高い貴人の納骨用に使われていた。東京ではこれまで破片が見つかったことがあるだけで、完全な形での発掘は初めて。くすんだ緑色の肌には素朴な美しさがあり、市場に出れば一千万の呼び値が出るほどの貴重品という。

こうしたツボ類のわきでは、火葬した人骨の破片が多数発見されており、同センター1では出土品を総合して鎌倉時代初期の西暦一二一〇年前後を埋葬時期と推定。それが「だれか」については、武蔵国分寺の高僧か、武蔵国府の役人の可能性が強いとみている。

同センター・石井則孝調査課長の話「三筋壺の発見は、当時すでに東海地方との流通が行われていたことを示しており、意義深い。しかも、普通と違って中には骨が入っておらず、魂を封じ込める意味で埋められたもののようだ。墓制を知るうえでも貴重な資料になる」

読売新聞　昭和59(1984)年1月20日付

遺跡の地形

調査当時、遺跡の地形は独立した小山のような形状をしており、北に多摩川を挟み武蔵野台地を一望できる絶好の位置にあった。この地形と立地を活かすことで、奈良時代は武蔵国分寺創建のための瓦生産がこの場所で行われ、中世には北の監視や押さえの役目があったと考えられている大丸城が築かれた。

調査前の地形

出土した五輪塔

1号板碑群検出状況

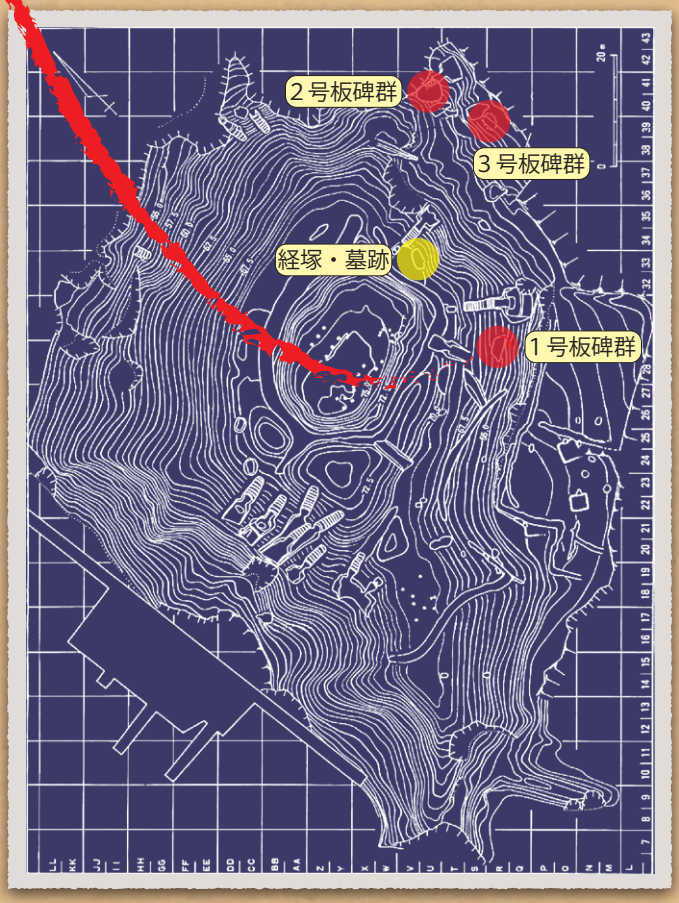
出土した板碑

集められた板碑と五輪塔

遺跡からは3箇所の板碑群が検出され、中でも「1号板碑群」は残存状態が良好で、29基の板碑と五輪塔の一部が見つかっている。これらは、板碑の紀年銘から14世紀～15世紀を主体としており、本来別の場所に立てられていたものがこの地へ集められたと考えられている。

板碑や五輪塔は、亡くなった人へ冥福を祈る「追善供養」や、生きている間に自分の死後の冥福を祈る「逆修供養」のために立てられる供養塔（塔婆）である。また一方で、12世紀～13世紀の経塚や墓跡といったものもこの遺跡から見つかっている。

ここには寺院や館跡はなく、大丸城との関りや経塚と板碑群との関連性についてもいまだ不明な点が多い。しかし、こうした特殊な出土状況から、中世初期の頃より葬送や仏教儀礼を行う神聖な場所として認識されていたことがうかがえる。



調査全体図

⑦ No.450遺跡

所在地：多摩市乞田谷戸根980他
調査期間：昭和58年8月1日～12月10日
　　昭和58年11月12日～昭和59年8月15日
時代：旧石器時代、縄文時代、弥生時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献15

Location.
980, Kotta yatone, Tama City, Tama, etc.
Excavation.
Aug. 1st, 1983–Dec. 10th, 1983
Nov. 12th, 1983–Aug. 15th, 1984
Period.
Paleolithic, Jomon, Yayoi, Nara, Heian, Medieval, Early Modern

縄文土器に魚骨で模様

この遺跡は多摩ニュータウン通り沿いに400メートル以上にわたって広がっていた。旧石器時代以降、様々な時代の生活の痕跡が見つかっている。中でも、魚の骨で模様をつけた縄文土器は極めて珍しく、注目を集めた。

This site extended for 400 meters along Tama New Town Dori Road.
The excavation revealed evidence of repeated human habitation in the area spanning various periods, with the oldest dating back to the Paleolithic era.
Of particular note among the artifacts is Jomon earthenware decorated with fish bone patterns, an exceptionally rare find.

毎日新聞　昭和60（1985）年11月7日付

イワシ文様の縄文土器

多摩ニュータウンの遺跡から発掘

深鉢口縁にクッキリ

骨を「杉綾」形に押しつけて

縄文土器の文様の意味を探るカギとなるイワシ文様の土器片

土器の表面にイワシの骨を押しつけて文様にした縄文土器片が、六日までに東京多摩市乞田九八〇の多摩ニュータウン「NO450」遺跡で発掘された。魚の骨をそのまま文様付けの道具にした縄文土器の発見は全国でも初めて。文様には縄、貝殻などが知られているが、それに宗教性があるのか、実用的なものなのかなどはナゾだった。考古学関係者は「縄文人がなんのために文様を付けたかを解き明かすカギになる」と興味を寄せている。

この土器片は、財団法人・都埋蔵文化財センターが五十八年度から続けている調査で出土した約二千点のうちの一点。縦横五㌢、厚さ二㌢で、他の出土物などから縄文前期前半（約六千年前）の深鉢の口縁部の破片とみられる。表面の文様は一見して竹ベラで付けたようにみえるが、同センターが魚類の専門家に見せたところ、大型のマイワシの骨を上下四方向に互い違いに押し、「杉綾」形の文様を作ったことがわかった。

これまで北海道千歳市、宮城県鳴瀬町で、サケなどの大きな魚の背骨をバラして作ったヒースのようなものを回転させて内形の文様を付けた縄文土器は出土しているが、今回のように魚の骨をそのまま平らに押し付けた文様は他に例がない。

「さすが縄文人　ダイナミック」

縄文土器の文様研究の権威、小林達雄国学院大教授の話　他に例のない発見で大変面白い。魚骨をまともに押しつけるなんて、さすがダイナミックな縄文人という感じがする。縄文土器の文様は、縄や貝殻など自然界や身の回りにあるものをそのまま写す特徴があるが、骨の形の持っている面白さを文様に使った感覚は鋭い。たぶん、この土器は魚を料理するために使われたのではないか。縄文土器の文様の意味を考える上で、重要な材料となる。

同センター調査課の可児通宏主査によると、縄文時代、東京湾は多摩市から約十七㌔南の川崎市溝口付近まで広がり、同市域を含む多摩丘陵の縄文人は海辺の縄文人と交流し、魚の干物などを食べていたと想像できるという。

この土器の文様もイワシを食べているうちに、残った骨の形を見て「いままでにない変わった文様ができる」と思いついたとみられる。

このイワシの骨の文様は、縄文前期後半（約五千五百年前）に関東地方周辺で広範囲に作られた諸磯（もろいそ）式土器の肋骨（ろっこつ）文様に酷似している。この文様は竹ベラで彫られているが、今回、出土したイワシの骨の文様がそのオリジナルとみることができる。

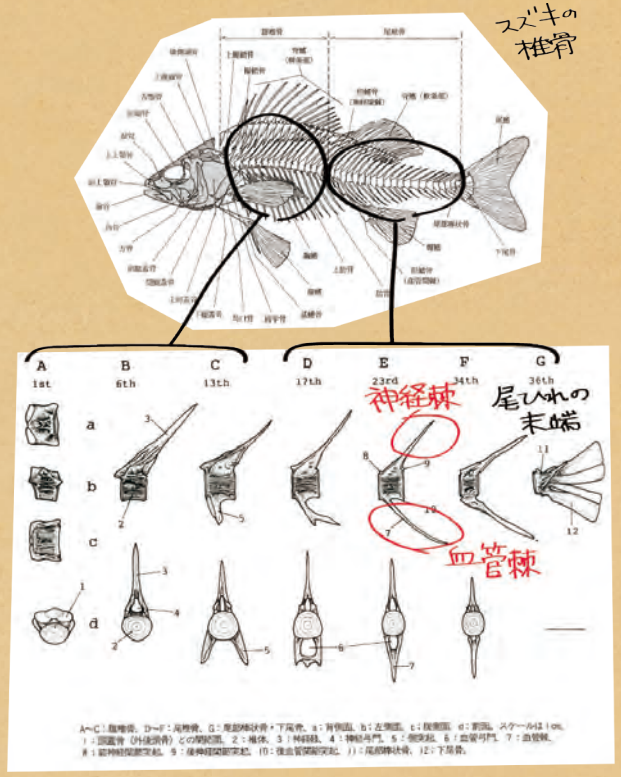
縄文土器の文様は非常に記号的で、縄文人のどういう観念を表しているのかナゾ。しかしイワシの骨の文様は、食べた魚の骨に直接結びついており、可児主査は、この文様が魚を煮たきする土器をほかと区別する〝しるし〟だった可能性があるという。そうすると、ふつう文様を施した土器も魚料理のために使われたと推測でき、文様のナゾを解く大きなカギを握っていると分析している。

遺跡の場所

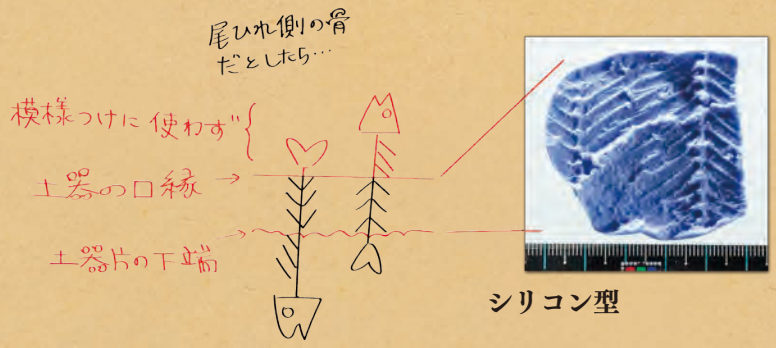
Google Earth より（一部改変）

意図された「杉綾形」

魚の背骨は、位置や魚種によって様々な形をしている。展示の土器に見られるような比較的左右対称な形は、「杉綾形」を神経棘と血管棘の跡と仮定するならば、背骨の中でも尾ひれ側のものだろう。とはいえ尾ひれの末端の特徴的な形は認められないため、末端付近を除く部分だ。背骨でも頭に近いほうは内臓を囲うため肋骨が立体的につくのに合わせた形をしており、当て方によっては左右対称にもなりえるが、可能性は低いように思える。なんにせよ、展示の土器片の上端は土器の縁に近いと考えられることから、左右対称の形に近くない部分の骨は模様つけに使われなかったと考えられる。つまり、「杉綾形」を表現できる部位のみが意図的に選ばれたことになる。いったいこの模様にはどのような意味が込められたのだろう。



魚の椎骨（背骨を構成する骨）の形
（引用元：文献 16）



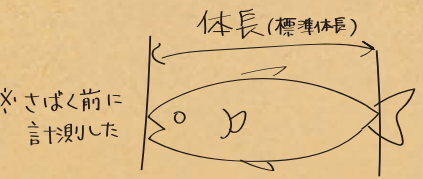
シリコン型

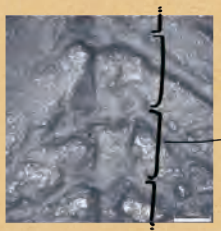
なんの魚の骨？

模様つけに使われた骨は「イワシ」と報告されているが、表面からの観察では確認しづらい。そこで、シリコンを使って土器の表面の形をとってみると、そこに押し付けられた魚骨の形がよく分かる。

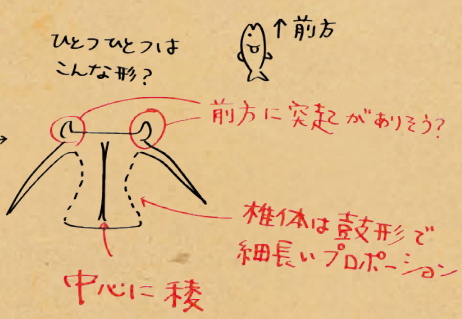
椎骨の大きさや鼓のような形の椎体は確かにイワシ類に似ている。中心の稜線の強さはウルメイワシに近いだろうか。しかし前方の突起の形がイワシ類よりも外側に開いているようにも見える。実物の「杉綾形」の部分は魚骨にしては太すぎるように思えるが、後から別の道具を押し付けているのかもしれない。

細かい形状からこれが魚骨であることは確かであり、さらにこれが「イワシ」であると推定された根拠も確かめられた。しかし、イワシ類とは異なるように見える箇所もあるため、検討を続けたい。





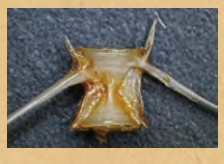
シリコン型（拡大）



※魚骨の写真は、シリコン型（拡大）の写真と倍率を合わせています。

マガレイ
体長 20.6cm

マサバ
体長 33.2cm



ニシン
体長 30.1cm

ウルメイワシ
体長 21.0cm

マイワシ
体長 22.5cm

⑧ No.753遺跡

所在地：多摩市鶴牧二丁目（旧地名　多摩市落合入乃谷2599）
調査期間：昭和57年9月15日～昭和58年2月28日
時代：縄文時代、古墳時代、近世
発掘調査報告書：文献17

縄文前期の〝タイムカプセル〟

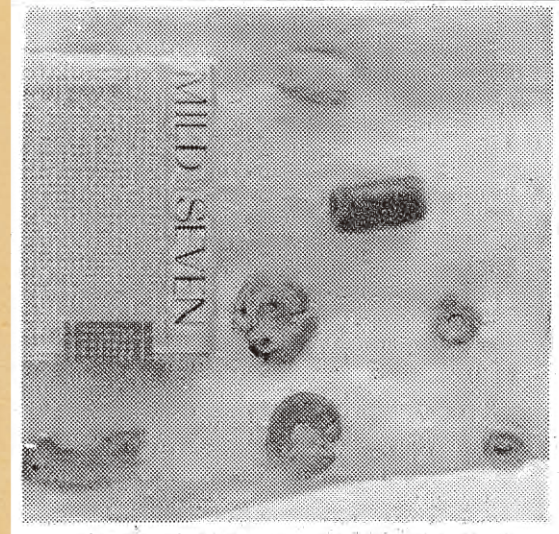
遺跡は、後の土地利用などにより原状をとどめていないことも多い。ところが、本遺跡は地崩れ層に覆われたため、6千年前の墓場とそれを取り巻く大量に廃棄された土器・石器などが極めて良好な状態で残されていた。まさに〝タイムカプセル〟と呼ぶにふさわしい。

Many archaeological sites have been altered due to subsequent land use and other factors. However, this particular site was covered by a layer of collapsed earth caused by a landslide from the adjacent hillside, which preserved a 6,000-year-old graveyard and a large amount of discarded pottery, stone tools, and other artifacts in excellent condition. It is truly worthy of being called a “time capsule”.

Location.
Tsurumaki, Tama City (Ochiai Irinoya, Tama City)
Excavation.
Sep. 15th, 1982–Feb. 28th, 1983
Period.
Jomon, Kofun, Edo

大量の縄文土器発見

多摩ニュータウン遺跡　墓穴からは耳飾りも



多摩ニュータウンで出土した石製の耳飾りや首飾り片

多摩ニュータウンで、六、七千年前の縄文時代前期の土器が大量に出土、さらに墓穴から土製の耳飾りなどの副葬品が見つかった。ニュータウンの遺跡調査をしている都埋蔵文化財センターが三日発表したもので、ニュータウン内でこれほど大量の縄文土器が見つかった例はなく、しかも墓穴と耳飾りがセットで見つかったのは初めて。発掘を終えた縄文遺跡の下から新たに見つかったもう一つの遺跡に、センターでは続く発掘調査に期待を寄せている。

縄文土器や副葬品などが大量に出土したのは、ニュータウンのほぼ中央にある多摩市落合の「多摩ニュータウン753遺跡」。この753遺跡は、昨年十一月に発掘調査を終えたが、同月末に断層調査したところ、三㍍ほど下に、もう一つの縄文前期の遺跡が見つかり、引き続き発掘調査をしてきた。

これまでの調査では、墓穴十二基が見つかり、この周辺から収納ケース（縦四〇㌢、横六〇㌢、深さ一〇㌢）で百八十箱分もの土器が見つかった。土器は復元するとつぼ、かめが六十個にもなった。また墓穴の中からは副葬品とみられる石製の玦状（けつじょう）耳飾りが三点、首飾り片が五点、土製の耳飾りが多数あった。さらに死者の頭にかぶせた「かめ」も出てきたが、人骨は溶けてしまっていた。

このほか、焼いた石で動物の肉を焼いてくんせいをつくったとみられる集石群が六カ所あったが、住居跡は三百までの調査で発見されていない。

縄文前期の土器や墓穴、耳飾りは、千葉県船橋市の飯山満東遺跡や神奈川県海老名市の上浜田遺跡でも見つかっているが、大量な土器と墓穴の数の点では〝落合遺跡〟が上回っている。

同センターではあと二週間ぐらい住居跡などの確認調査を続けるが、同センターの石井則孝調査課長は「縄文時代におそらく数十年単位で山津波が起き、埋まっていたらしい。大量の土器が出たところから近くに集落跡がある可能性は十分。六、七千年前のものがすっぽり出土したのは珍しく、まるで〝タイムカプセル〟だ」といっている。

東京新聞
昭和58(1983)年2月4日付

遺跡の現況　鶴牧西公園の果樹園

遺跡の場所　Google Earth より（一部改変）

大量の縄文土器

No.７５３遺跡からは、地崩れ層の下に墓壙群11基とこれを取り巻く5ヶ所の遺物集中部が見つかった。ここからは約三万点に及ぶ土器・千三百点余りの石器、土製や石製の装身具、焼成粘土塊などが出土した。

記事その後…

No.７５３遺跡が調査された昭和57（１９８２）年以降も多くの諸磯式期の遺跡が発掘されたが、本遺跡の遺物出土数は他に類を見ない。復元された数多くの土器は、諸磯式期の土器の編年研究に欠かせない資料である。さらに、墓壙内から検出された耳飾りや土器は、この時期の葬送・墓制を知る上で貴重な例となっている。

遺物集中部から出土した土器

大きな石で土器がつぶれている。

浅鉢を伏せた状態。

1号土壙（左）と4号土壙（右）

口縁部のない浅鉢を伏せた状態。

8号土壙

諸磯式土器とは

諸磯式は、神奈川県三浦市にある諸磯遺跡から出土した土器を標識とする縄文時代前期後半の土器型式で、a・b・cの3型式に細分されている。

特徴としては、文様施文具に竹管を多用すること、深鉢以外の器形も多く見られることなどがある。

本遺跡の遺物集中部から出土した土器は複数の遺物集中部にまたがって接合する個体も多く、３０２個体が器形のわかるまで復元され、報告されている。出土土器の大半は諸磯b式期に分類される。

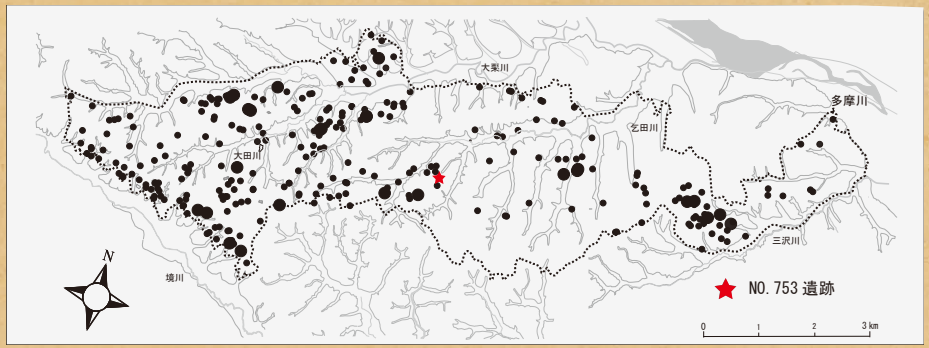
11基検出された墓壙群

多摩ニュータウン遺跡群の縄文時代前期後半の遺跡

No.７５３遺跡は、縄文時代前期後半諸磯式期の遺跡である。諸磯式期は今からおよそ6千年前で、温暖化による海水面の上昇（縄文海進）がピークを迎えた時期にあたる。この時期、この地域でも遺跡数が際立って増加する。1軒～数軒の小規模集落の他、遺構を伴わない散布地、本遺跡のような墓壙群、集石などが認められる遺跡が多く見られるようになる。

5号土壙

穴の底に玦状耳飾２点



多摩ニュータウンにおける縄文時代前期後半の遺跡分布（引用元：文献18）

⑨ No.72・795・796遺跡

所在地：八王子市堀ノ内5号470他
調査期間：No.72・795 昭和62年11月16日～平成13年1月15日（8次）
No.796 昭和56年9月17日～平成2年12月26日（7次）
時代：旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献19

Location.
Horinouchi,Hachioji City, Tokyo
Excavation.
№ 72・795site Nov.16th,1987-Jan.15th,2000
№ 796 site Sep. 17th, 198 1 –Dec. 26th,1990
Period.
Paleolithic, Jomon, Kofun, Nara, Heian, Medieval, Edo

縄文中期の大きなムラ

この遺跡は、南北を川にはさまれた丘の上にあり、日当たり・水はけが良好である上に、水場へのアクセスもよい。起伏の激しい丘陵地にしては広い平坦面もあり、縄文人にとって住み続けやすい条件がそろっていた。

ここから全国的に見ても規模の大きな縄文時代のムラが発見されたことは、当時の紙面にも大きく取り上げられた。

報道の後も続いた発掘調査により、最終的には縄文時代前期の住居跡17軒、中期の住居跡275軒などが見つかっている。

The site is situated on a hilltop, flanked by rivers to the north and south, and benefits from ample sunlight, proper drainage, and access to a water source.

The site features a wide, flat terrain in a hilly area with undulating topography, making it an ideal location for Jomon people to settle.

The discovery of a Jomon-era village at this site, which was notably large even on a national scale, garnered widespread media coverage at the time.

Subsequent excavations uncovered 17 pit houses from the early Jomon period and 275 from the middle Jomon period, following the initial media coverage.

住居跡には時期差がある

新聞記事に取り上げられたのは、この遺跡から見つかった縄文時代中期のたくさんの住居跡。すべてが同時に建っていたわけではなく、約500年おきに3つの時代に区分されることや、それぞれの時期にいくつかのグループに分かれて住んだと考えられること、住居跡は環状に並んでいて内側ほど新しい時期に建てられたことなどが紹介されている。こうした考察を支えた根拠は、土器の研究だった。

八王子の多摩ニュータウン予定地から

縄文中期の住居跡130戸

石器や土器、首飾りも
「わが国最大」の期待十分

わが国最大規模と見られる縄文中期の住居跡（八王子市堀之内で）

八王子市堀之内の多摩ニュータウン建設予定地で、三百戸を超えると見られるわが国最大規模の縄文時代の集落跡の発掘調査が進められている。都埋蔵文化財センターが昨年二月から発掘を始め、これまでに同時代中期（約五千年前）の住居跡百三十戸が見つかった。住居跡からは土器、石器のほか、ヒスイの首飾り、五対の深さのローム層の中耳飾りも多数発見されており、縄文人の集落での暮らしぶり解明に役立ちそう。から百三十戸分の住居跡が見つかった。

発掘が進められているのは京王相模原線堀之内駅の北約一キロ、野猿街道に面した南側斜面で、全面積約五万八千平方㍍。区画整理事業のため、うち約一万平方㍍が発掘され、地表約一・

同センターによると、縄文中期の中でも約五百年おきに三つの時代に建てられたものらしい。それぞれの時期に約十グループ、丘陵ごとにかたまって五―六戸程度の集落に分かれて住んでいたと見られる。

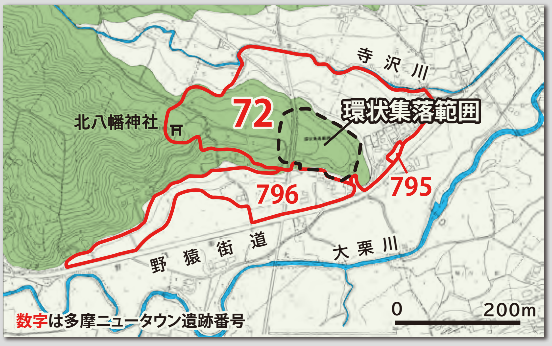
このうち、床に石を手鏡形に敷き詰めた「柄鏡（えかがみ）形敷石住居」は約二百年の間だけ、南関東、甲信地方にだけ分布したもので、十五戸がまとまって出土したのは珍しい。住居の大きさもさまざまで、それぞれの時代の気候や経済力に家の大きさが左右されているのが見てとれる。

石井則孝調査研究部長は「調査が進めば国内でも最大規模の住居跡となるかもしれない。調査はとりあえず六月で終わるが、土器やアクセサリーなどから当時のムラの暮らしぶりがつかめそうだ」と話している。

読売新聞　平成元（1989）年4月27日付
（傍線の書込みあり）

環状集落の範囲（調査時の空撮写真）

住居跡分布図
時期の新しい住居ほど内側に分布している。



遺跡の位置

最大級の縄文住居跡発掘

多摩ニュータウン　環状、300戸以上か

多摩ニュータウンの住宅建設予定地の遺跡調査を進めている東京都埋蔵文化財センターは、八王子市堀之内の遺跡で縄文時代中期（約五千年前）の住居跡百三十戸を発掘、二十二日、地元民らを対象に開催した見学会で遺跡の全容を明らかにした。住居跡は環状に配置され、今後発掘が進めば三百戸を超えるわが国最大級の縄文集落跡が姿を現しそうだ。住居跡から出土した数万点の遺物の中には土器、石器類のほか、ヒスイの首飾り、耳飾りや信仰に使われた土偶、石棒などもあり、縄文人のムラの営みの解明に役立つとみられる。

発掘されたのは「多摩ニュータウンNo.72遺跡」で、京王相模原線堀之内駅の北約一キロの多摩丘陵中腹（標高約七十メートル）にあり、ほぼ平たんな所。区画整理事業に先立って五万八千平方メートルを調査することになり、昨年二月からこれまでに約一万平方メートルを発掘。地表から約一・五メートルの深さのローム層の中から百三十戸分の住居跡が見つかった。

同センターによると、これらの住居跡は住居の形態や出土した土器によって、縄文中期の中でも約五百年おきに三つの時代に区分けされる。最も古い住居跡は土器の様式でいうと約五千年前の勝坂式、続いて約四千五百年前の加曽利式、最も新しいのは約四千年前の柄鏡（えかがみ）型敷石住居跡だ。

このうち、柄鏡式敷石住居跡は約二百年の間だけ、東日本の一部で出現したとみられるもので、十五戸もかたまって見つかったのは初めて。時代が新しくなるにつれて、住居は環状の中心部へ向かって移築されているのも、この遺跡の特色のひとつ。

住居跡の広さはさまざまで、最も大きいのは約八メートル四方。一辺に三つの大きな柱の穴が深く掘り込まれ、中心部に石で囲んだ炉の跡がある。増築した形跡もみられ、家族数が増えるとスペースを広げたとみられる。

環状に連なる住居跡は五、六戸ずつのグループに分かれており同センターの石井則孝調査部長は「血縁ごとにかたまって家を建てたのだろう。ただし百三十戸が全部同じ時期にあったのではなく、それぞれの時期に約十グループ、五十―六十戸程度の集落があり順次建て替えていったものとみられる」といっている。

わが国最大級とみられる縄文中期の住居跡＝東京・八王子市堀之内の多摩ニュータウンで

東京新聞　平成元(1989)年4月23日付

縄文中期の住居跡130戸発掘

十数戸は「柄鏡形敷石」

ヒスイのペンダントも出土

八王子市堀之内の多摩ニュータウン建設予定地で、縄文時代中期の住居跡百三十戸がこのほど発掘された。これまで一つの住居群から一―二戸しか発掘されたことのなかった柄鏡（えかがみ）形敷石住居跡が十四―十五戸も一度に見つかっており、発掘調査を進めている都埋蔵文化財センターでは「都内では最大規模の住居跡」と話している。

多摩ニュータウン72遺跡

住居跡が見つかったのは、多摩ニュータウンNo.72遺跡。京王相模原線堀之内駅の北約一キロにある丘陵の台地の上。ふもとに大栗川が流れ、野猿街道に面した場所だ。

区画整理事業が行われるのに先立ち、昨年二月から遺跡五万八千平方メートルのうち二万平方メートルを発掘したところ、住居群が出てきた。深さは、約五十センチ―一・五メートル。

住居跡は、北に向かって弧を描くように幾重にも並んでいた。外側ほど古い時代のもので、最も内側には、かつての手鏡の形をした、柄鏡形敷石住居跡が見つかった。床には直径四十―五十センチの円形の平たい石を敷き、居住性が高められていた。

住居跡が見つかった多摩ニュータウン72遺跡＝八王子市堀之内で

住居の大きさは、最大約八メートル四方から約四メートル四方のものまで様々。なかには、柱の穴が並んだ外側に、さらに柱の穴が並んだものまであり、家族数が増えたために増築したものとみられる。

また、住居跡からは大量の土器や打製石斧（せきふ）、矢じりなどのほかに、南関東では産出しないヒスイで作ったペンダントなど数万点が出土した。特に、ヒスイは、東京に最も近い所でも新潟県や富山県でしかとれず、当時の住民の広い交流ぶりがしのばれる。

センターの比田井民子主任調査研究員は「当時の人間の平均寿命は三十歳ぐらい。このため、百三十戸が同時期に一度にあったのではなく、四十―五十戸程度のムラが世代交代したのではないか」と話している。

朝日新聞　平成元(1989)年5月5日付
（承諾番号23-0176）

土器から読み解く時期差

土器は作られた時期や地域によって特徴がある。そのため、形や模様の違いを根拠に「型式」を定め、型式間の新旧を判断することができる（土器編年）。これは土器が出土した住居跡の年代を推定する根拠になるなど、遺跡の調査にとって欠かせない方法である。

この遺跡から出土した百万点を超える土器を見てみると、縄文時代早期から後期に至るものが含まれているが、95％は中期のものだった。

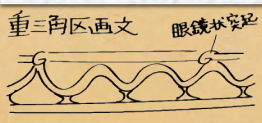
中期前半

勝坂式

勝坂式土器は、縄文時代中期前半に、主に中部地方から関東地方西部に分布する。

勝坂式土器の分布

勝坂式の中でも古い段階の土器。口縁部には重三角区画文をもつものが多く、波の頂部には後の段階で大形化する眼鏡状突起がつく。ペン先状工具の連続刺突による三角押文が特徴。



19号住居跡出土

19号住居跡出土

加曽利E式

加曽利E式土器は、縄文時代中期後半に関東西部で成立し、関東全域から中部地方に分布する。

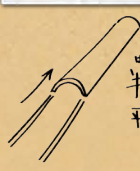
※多摩ニュータウン地域の加曽利E式と曽利式は要素が混ざっていて区別が難しいものも多い。

加曽利E式土器の分布

加曽利E式は、大木式の模様構成に勝坂式の要素を取り入れて成立したと考えられている。模様は勝坂式に較べ簡素で、隆帯の上に刻みをつける意識は薄い。

隆帯の上に綾杉状や連続爪形文の刻みをつける。半裁竹管を用いて平行な線をひく。隆帯による区画内を幾何学的な模様で埋め尽くす「パネル文」と呼ばれる模様をもつ土器が盛行する。

太めの粘土ヒモをはりつけたもの。


半裁竹管（半分に割った竹）で平行な沈線を引く。

溝状の線のこと。

曽利式

曽利式土器は、加曽利E式に並行して山梨県甲府盆地を中心にして八ヶ岳南麓から富士川下流域、伊豆地方、西関東に分布する。

曽利系土器の分布

曽利式土器は、勝坂式を母体として成立したと考えられている。

勝坂式の後半ごろには、突起や把手が大きくなり、底の形が屈折するものが一般的になる。隆帯の上には新しく交互刺突が施されるものもある。

棒状工具で沈線をひく。

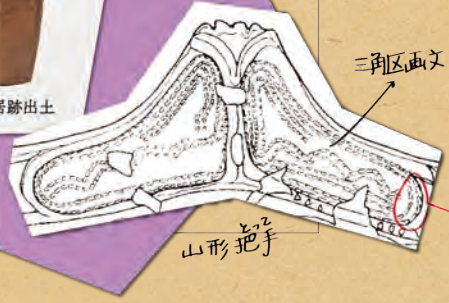
阿玉台式

阿玉台式土器は、勝坂式と並行して、主に関東地方東部に分布する。

46号住居跡出土

この時期には山形把手が主体となり、把手の頂部から垂れる隆線で三角区画文をつくる。模様は隆帯と角押文などからなり、勝坂式に比べ簡素な印象。

阿玉台式土器の分布

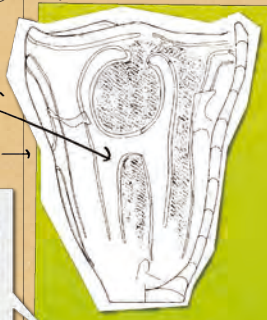


No. 72・795・796 遺跡で見つかった縄文時代中期～後期の土器型式（参考：文献 20）

称名寺式

称名寺式土器は、縄文時代後期初頭に関東一円に分布する。

称名寺式土器の分布



胴部のくびれを境に模様を上下に分ける。磨り消しではなく、無文部分を避けて縄文を充填する。

168 号住居跡出土

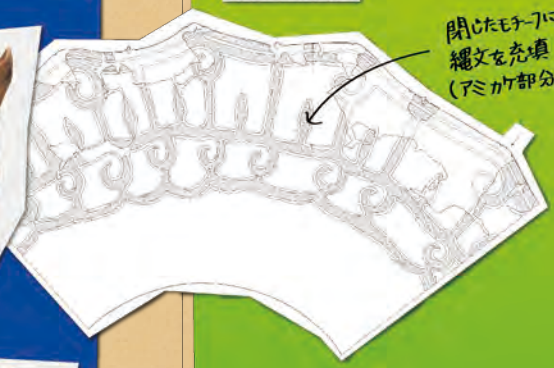
ある区画の模様を磨り消す「磨り消し文」が登場する。

185 号住居跡出土

口縁部は平らなものが多くなり、長方形の区画文と渦巻文からなる文様構成が確立する。

52 号住居跡出土

16 号埋甕



26 号住居跡出土

連弧文土器

加曽利E式と曽利式の分布圏。特に相模野台地・多摩丘陵・武蔵野台地で多数出土する。

94 号住居跡出土

72 号住居跡出土

口縁部は粘土紐を貼り付けた弧線で、一端が渦巻状となる一群。

77 号住居跡出土

遠方からやってきた土器

大木式

324 号住居跡出土

中富式

75 号住居跡出土

45 号住居跡出土

頸部のくびれがほとんど見られない。胴部は沈線で縦長に区画される。

エピローグ

時に埋もれても色褪せない価値

多摩新街遺跡切抜帖、お楽しみいただけましたでしょうか？

ご覧いただいたように、調査当時は注目を集めていた多摩ニュータウン遺跡群ですが、その記憶は再び時の流れの中に埋もれつつあるようにも見えます。

しかし、かつてこの地にあった遺跡の記憶は当館で大切に保管されています。これらは過去の営みを未来に伝えるかけがえのない資料として、その価値はこの先も色褪せることはありません。私たちはこれからも、この貴重な遺跡の情報を継承し、未来に発信していきます。

これからも折に触れ、当館で遺跡の記憶に触れてみてはいかがでしょうか？

We hope you enjoyed our special exhibition “Tama New Town Archaeology Scrapbook”.

Archaeological sites in Tama New Town were once in the spotlight at the time of their investigation, but their memory seems to be buried again in the flow of time.

However, the memory of the excavations that once existed in this area is being carefully preserved in this museum. The materials on display are invaluable resources that bridge the past to the present and future, and their value will not fade away in the future.Our mission is to ensure that the knowledge and insights gained from these valuable excavations are passed down and shared for generations to come.

Why not visit this museum from time to time and touch the memory of the excavations?

当館　体験コーナー

実際の出土品を型取りして造った立体土器パズルなどで考古資料に親しめます。

当館　特別収蔵庫

収蔵庫をガラス越しにご見学いただけます。

遺跡を庭園に

多摩ニュータウン遺跡調査会は、特に重要な遺跡のいくつかを、自然公園などとして保存するよう要望した。No.57遺跡はそのうちの一つで、この遺跡の集落部分を保存整備したものが当センターのとなりにある遺跡庭園「縄文の村」である。

この集落跡は丘の上の平坦地にあり、集落の近くには湧水、崖の下には川もあって、「縄文の村」としての特徴をよく備えていた。整備の際にはそうした景観を壊さないように配慮し、住居や縄文の森の様子も再現して、縄文時代を体感できるようにした。

Tama New Town Iseki Chosa Kai, the organization responsible for archaeological surveys of the Tama New Town area, requested that several particularly important archaeological sites be preserved as natural parks.

Site No. 57 is one of those sites, and the settlement area of this site has been preserved and developed into the adjacent Jomon Village archaeological garden at this center.

The Jomon settlement was located on a flat area on top of a hill, with a spring near the settlement and a river below the cliffs, exhibiting many characteristics of a typical Jomon Village.

During the development process, great care was taken to preserve the natural landscape and to accurately reproduce the houses and the Jomon forest, allowing visitors to experience the Jomon period.

No. 57 遺跡

所在地：多摩市落合1-14-2
調査期間：昭和45年1月26日～2月25日
昭和45年4月29日～5月31日
昭和48年5月28日～9月26日
昭和57年9月21日～昭和58年2月10日
時代：旧石器時代、縄文時代、中世、近世
発掘調査報告書：文献21

Location.
1-14-2 Ochiai, Tama City
Excavation.
26 January - 25 February 1970
29 April - 31 May 1970
28 May-26 September 1973
21 September 1982 - 10 February 1983
Period.
Paleolithic, Jomon, Medieval, Edo

クリ

オニグルミ

トチノキ

遺跡庭園の植物

多摩ニュータウンNo.57遺跡

「縄文の村」公園に

暮らし復元、教材に利用

都内最大、来月オープン

来月初めにオープンする遺跡庭園「縄文の村」

多摩市落合の都立埋蔵文化財調査センターは、隣接する遺跡を公園施設に整備、来月初旬に遺跡庭園「縄文の村」としてオープンさせることになった。発掘された遺構をそのまま保存、縄文時代の生活、環境を復元して子供たちの教材に役立てるのが目的。遺跡公園としては都内で最大規模となり、多摩ニュータウンにまたひとつ新名所が生まれそうだ。

遺跡庭園となるのは、昭和四十五年―五十七年に発掘調査された「多摩ニュータウンNo.57遺跡」。広さは約八千五百平方㍍で先土器時代、縄文時代を中心に遺物が発見された。五十七年、都が買収し、約一億四千万円をかけて昨年三月から公園として整備していた。

整備にあたり、同センターは、「ひとつの時代に的を絞って環境を復元した方が学習しやすい」と、遺跡を保存したまま、縄文時代を再現することになった。

このため、遺跡の上に約五十㌢の高さで土を盛り、その上に住居などを作る方法を取った。住居は当時の材料を選んで、約六千年前、四千五百年前、四千二百年前の三つの時代の竪穴（たてあな）や敷石の住居を二棟ずつ三棟を復元した。また、国内の植栽は縄文時代から生息している植物の、ケヤキ、クヌギ、シラカシ、カヤ、クリなど約五十種類を選び、約二万六千本を植えた。このほか、プラスチック製の竪穴住居模型、わき水なども整備。住居には、自由に入れるようにしてある。

同センターの佐藤攻士任研究員は「ほかの遺跡公園では復元住居に入れないことが多い。ここでは、子供たちが大昔の生活を感じられるようにと、出入りを自由にした。動物や木の実を取って暮らしていた時代がわかれば、それ以降の、水田で稲を作った弥生時代も自然に理解できてくるはずでは」と話している。

読売新聞　昭和62(1987)年3月10日付

開園当初の「縄文の村」空撮写真

復元住居と住居跡レプリカ

（右）縄文中期の5号住居がモデルのC棟
（左）4号住居跡と5号住居跡のレプリカ
2軒の住居跡レプリカは、実際に住居跡が見つかった地点につくられている。左側の5号住居を改めて別地点に復元したものがC棟だ。

他遺跡の成果も活用

敷石住居は縄文時代中期の終わりごろから後期のはじめにかけてつくられる、床に石を敷いた住居だ。再利用するために一部の石を抜き取った状態で見つかることが多いが、22ページでも紹介したNo.72・795・796遺跡のある住居跡では敷石が完全な形で見つかった。実は、ここに使われていた石は現在、遺跡庭園「縄文の村」にある復元住居に移築されており、誰でもその上に立つことができる。

この遺跡の調査成果としてもう一つ欠かせないのは、付近の泥炭層から採取された植物の花粉、種実、木材などから縄文時代中期の多摩丘陵の植生が明らかにされたことだ。この成果は庭園内に植える植物を選ぶ際の参考にもなった。

The stone-paved houses are dwellings constructed during the late Middle Jomon period through the early Late Jomon period, where stones were used to pave the floors.
Although it is common to find these houses with some stones removed for reuse, at this archaeological site, the stones were found in complete form.

The stones used here have been relocated to a reconstructed dwelling in the Jomon Village archaeological park, where anyone can stand on them.

Another indispensable result of this site's excavation is the revelation of the vegetation in the Tama Hills during the middle Jomon period, based on the pollen, seeds, and wood samples taken from the nearby peat layer.

This finding also served as a reference for selecting plants to be planted in the park's garden.

58.6.29 アサヒ

No.72・795・796遺跡

4000年前の「敷石住居」

縄文時代中期か

原形ほぼ完全に残る

多摩川支流の大栗川そば

石斧や石棒なども出土

発見された敷石住居＝八王子市堀の内で

多摩ニュータウン内で遺跡発掘調査を進めていた都埋蔵文化財センターは二十八日、多摩川の支流大栗川に面した低地（八王子市堀の内）で、ほぼ完全に原形をとどめた「敷石住居」を発見した。今から約四千年前の縄文時代中期のものと見られる。関東地方の山地によく散在しており、同ニュータウン内でも多摩センター駅近くで発見されたことがある。

発見された住居の規模は、南北約六㍍、東西約四㍍。敷石部は五㍍×三㍍で、住居跡のほぼ中央には長径〇・七㍍の炉跡がある。敷石の配列は、炉跡を中心に良く整えられており、周囲を取り巻いている壁石も当時のままで見つかった。石棒や分銅形打製の石斧（おの）、装飾品とみられる三角形土製品などの遺物も出土した。

敷石住居は、関東、中部、東海地方によく分布している。縦穴住居と同じように、地面を掘り込んでつくられており、現代風にいえば、大きさは「1K」ぐらい。この住居については、一般的住居として使用したという説と、祭りを行う場所、との二説がある。敷石住居ができたころは、石を用いた墓地や配石遺構もでき、石の使用が流行したといわれる。

同地区の遺跡は都の区画整理事業予定地内のため、造成に先立って、昨年十月から発掘調査が行われていた。

遺跡の詳細は22ページ

朝日新聞　昭和58(1983)年6月29日付
(承諾番号 23-0176)　※記事レイアウトを一部変更しています。

新聞にのった遺跡たち

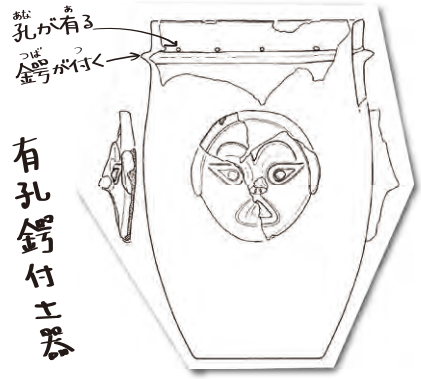
常設展示編

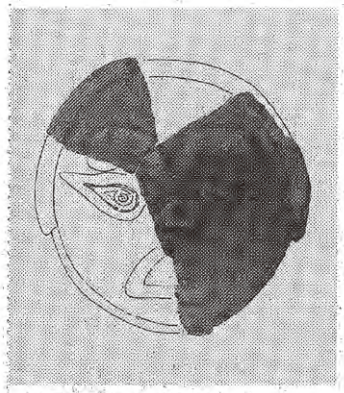
実は常設展示にも新聞にのった遺跡たちが。見出しとともに、５つの展示を紹介します。

《1》No.72・795・796遺跡

実は人面土器装飾

この冊子でもすでに２回登場したNo.72・795・796遺跡。実はまだまだ話題に尽きない。この土製品は、発見当時は左の記事にもあるように「土製仮面？」の可能性も挙げられていた。しかし、ひもを通す穴がないことや小形であること、さらにはその後に見つかった土器片と土の質や焼き加減、内面のカーブの具合が一致したことから、現在では有孔鍔付土器の装飾と考えられている。ちょうど、長野県大野遺跡で人面のついた有孔鍔付土器が出土したことも、この解釈見直しの契機となった。





発見された土製仮面

1994.2.10 毎日

日本最古の土製仮面？

縄文中期の住居遺跡から

多摩ニュータウン

東京都埋蔵文化財センター（森久保啓二所長）は九日、八王子市堀之内の多摩ニュータウン建設用地の縄文時代中期（約四千五百年前）の住居遺跡群から、人の顔の形をした仮面とみられる土製品のかけらを発見した、と発表した。これまで仮面状土製品は、縄文時代の後期から晩期のものが国内最古とされており、今回の発見はそれより五百年ほどさかのぼる。

かけらは遺跡の北側のたて穴住居跡の深さ三〇㌢の土中から見付かった。縄文時代人の顔を表現したとみられる、だ円形土製品のかけらで大小二片。完全な形だと、直径は一二㌢程度になる。厚さは〇・八㌢。表面には微量の赤い顔料が付着していた。まゆ毛のあたりが隆起し、目はやや吊り上がり、鼻筋が通った高い鼻の顔立ちで、女性を表現したとみられる。

仮面状の土製品は、宗教的な踊りなどの際に使われ、縄文時代後期初頭には、疫病などで急死した場合、他の人にうつらないようにと顔にかぶせて埋葬されたケースもあったと考えられている。

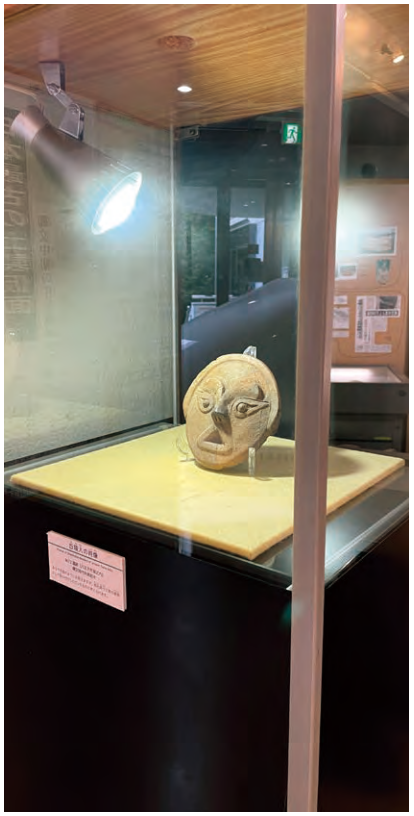
縄文時代は祭りなどの行事も増え、人々の生活が急速に発達した時代で、同センターは、「巫女がこの仮面を額や胸につけて神や自然の恵みに感謝したのではないか」と推測している。

お守りの可能性も

佐原真・国立歴史民俗博物館副館長の話　この時期の土製品の発見は前例がない。黒目の部分をかなり忠実に表し、造形美の観点からも興味深いが、顔の左右にひもをとりつける穴がないため仮面と断定はできないお守りとも考えられる。

毎日新聞　平成６（1994）年
２月10日付

（左）往時の姿の想定図
（下）展示室の入口にて常設展示中
※破損部分は石膏で復元しています。



《2》No.116遺跡

（発掘調査報告書：文献22）

〝縄文の有溝砥石を発見〟

（読売新聞　昭和60（1985）年10月25日付）

〝日本最古の「矢柄研磨器」発掘〟

（毎日新聞　昭和60（1985）年10月25日付）

矢じりが登場する時期に見つかるため、その棒状の溝から矢柄研磨器とも言われる砥石。八王子市の富士見台公園そばのNo.116遺跡で見つかった。

展示室の縄文時代草創期のコーナーで常設展示中

《3》No.313遺跡

（発掘調査報告書：文献23）

〝都内最大の横穴墓発見〟

（読売新聞　平成9（1997）年10月7日付）

町田市小山ヶ丘にあるNo.313遺跡で見つかった、大規模な石積みをもつ横穴墓。全国的にみても最大級であることや、石積みがあること、群集して見つかることの多い横穴墓が単独で、しかも丘陵頂部で発見されたことなどが珍しく、注目を浴びた。石を積んだ例は朝鮮にもあることから、渡来人の墓である可能性も指摘されている。単独で見つかったのは、一族が長くそこに住みつかなかったためか。

常設展示されているのは、墓から見つかった副葬品の数々。墓自体は原位置を留めていないが、町田市三ツ目山公園で実際の石を用いたモニュメントが公開されている。

展示室の古墳時代後期のコーナーで出土遺物を展示中

《4》No.342遺跡

（発掘調査報告書：文献24）

〝関東最古の硯出土〟

（東京新聞　平成2（1990）年6月14日付）

町田市小山地区にあるNo.342遺跡からは須恵器を焼いた窯や木製の皿などが見つかり、記事中で「古代の工業団地」とも紹介された。

見出しになった硯は7世紀後半のもので、京都府宇治市の国史跡「隼上り窯跡」で見つかっていたものとよく似ている。そのため、この時期に畿内・東海地方から工人が移り住み、中央の影響を色濃く投影した製品を作ったと推定されている。

古代の多摩丘陵では、No.342遺跡に限らず、豊富な資源を活かした手工業生産が活発に行われていた。展示ケースの中も要チェック！

展示室の奈良時代のコーナーで硯など須恵器を展示中

《5》No.513遺跡

〝第一級の資料　貴重な納骨用壺も〟

（読売新聞　昭和59（1984）年1月20日付）

企画展示で板碑と五輪塔を紹介した、No.513遺跡。記事に写真が掲載された「渥美壺」が常設展示されている。

この壺は骨粉などと共に土坑から出土した。ただ、壺の中に骨が埋納されていたのかは明確でない。近くには三筋壺や経筒も埋納されており、少なくとも鎌倉時代になんらかの祭祀がおこなわれた空間であったようだ。

展示室の平安・鎌倉時代のコーナーで展示中

〝稲城で古い瓦片大量に出土〟

（朝日新聞　昭和56（1981）年2月6日付）

多摩ニュータウンNo.513遺跡に関する話題は、実はそれだけにとどまらず、古代の瓦窯と中世の大丸城の発見でも注目を集めた。特に瓦窯については度々新聞に取り上げられ、右に挙げたような見出しが紙面を賑わせた。

体験コーナー前にて展示中

文献リスト

セクション	文献	文献
プロローグ	1	多摩ニュータウン30周年記念事業実行委員会 1998『多摩ニュータウン30年の歩み　過去から現在そして未来へ』
	2	東京都埋蔵文化財センター 2000『多摩ニュータウン遺跡　―No.247・248遺跡―』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第80集
	3	佐藤宏之 1988「多摩ニュータウンの遺跡群調査―陥し穴土坑と狩猟空間―」『縄文人の生活領域をさぐる―広域調査の成果と課題―』東京都埋蔵文化財センター
	4	東京都埋蔵文化財センター 1996『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第33集
No.769遺跡	5	東京都埋蔵文化財センター 1983『多摩ニュータウン遺跡　昭和57年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第4集(第5分冊)
No.426遺跡	6	東京都埋蔵文化財センター 1989『多摩ニュータウン遺跡　昭和62年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第10集(第5分冊)
	7	旧石器文化談話会 2021『旧石器考古学辞典 四訂版』
	8	北海道埋蔵文化財センター 1985『美利河1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 23巻
	9	鹿又喜隆 2021「最大の尖頭器と石槍をめぐって」『東北大学文学研究科研究年報』70
No.916・917遺跡	10	東京都埋蔵文化財センター 1995『多摩ニュータウン遺跡　平成4年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第19集(第2分冊)
No.107遺跡	11	東京都埋蔵文化財センター 1999『多摩ニュータウン遺跡　―No.107遺跡―』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第64集(古代編)
No.484遺跡	12	東京都埋蔵文化財センター 1984『多摩ニュータウン遺跡　昭和58年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第5集(第3分冊)
	13	国立歴史民俗博物館「古代・中世都市生活史(物価)データベース」(2004年7月更新版)
No.513遺跡	14	東京都埋蔵文化財センター 1987『多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第8集(第4分冊)
No.450遺跡	15	東京都埋蔵文化財センター 1986『多摩ニュータウン遺跡　昭和59年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第7集(第2分冊)
	16	樋泉岳二 1995「遺跡産魚骨同定の手引(Ⅱ)」『動物考古学』第5号 動物考古学会
No.753遺跡	17	東京都埋蔵文化財センター 1999『多摩ニュータウン遺跡　―No.753遺跡―』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第75集
	18	岩橋陽一2012「土器片の行方」『研究論集ⅩⅩⅥ　東京を掘る―東京都埋蔵文化財センター30年の軌跡―』東京都埋蔵文化財センター
No.72・795・796遺跡	19	東京都埋蔵文化財センター 1998・1999・2003・2004・2005・2006・2009『多摩ニュータウン遺跡　―No.72・795・796遺跡―』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集(1)～(22)
	20	小林達雄2008『総覧縄文土器』の各項(塚本師也「阿玉台式土器」、今福利恵「勝坂式土器」、細田勝「加曽利E式土器」、櫛原功一「曽利式土器」、中島庄一「称名寺式土器」)
エピローグ	21	東京都教育委員会 1988『多摩ニュータウンNo.57遺跡―遺跡の概要と整備のあらまし―』
新聞にのった遺跡たち ＜常設展示編＞	22	東京都埋蔵文化財センター 1987『多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第8集(第3分冊)
	23	東京都埋蔵文化財センター 2003『多摩ニュータウン遺跡　―No.313遺跡―』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第129集
	24	東京都埋蔵文化財センター 1993『多摩ニュータウン遺跡　平成3年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第15集(第5分冊)

企画展示解説会用資料
編集・発行　東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2 電話042-373-5296